奈良産業大学『産業と経済』第21巻第５号（2006年12月）47－84

現代方言に継承された《醒世姻縁傳》中の副詞

植田　　均
UEDA, Hitoshi

［提要］

《醒世姻縁傳》に見える副詞が現代共通語では既に消失しているが、方言ではなおも現代に残存・継承しているものがある。そういう副詞にはどのようなものがあり、また、どの地域で残存・継承しているかに焦点をあてた。

《醒世姻縁傳》より少し前の《金瓶梅詞話》及び少し後の《紅楼夢》、更に後の《兒女英雄傳》などを用い、現代語までの言語の「流れ」を追う。

見出し語はアルファベット順に排列してある。

拔地　bádì　（跋地）

釈義：「[副詞]憎々しげに、荒々しく」。現代共通語では一般に“狠狠地”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.3203)に“拔地”(釈義“狠狠地”)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。同書(p.6104)に同音語“跋地”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)とする。

《現漢方大》(p.2014)に“拔地”の釈義“狠狠地”は未収。なお、同書(p.4318)に“跋地”自体が未収。

近世語辞典の《例释》に“拔地”(釈義“狠狠地”)を《醒》第三回より挙例。同音語“跋地”を《醒》第四十四回より挙例。《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

珍哥把晁大舍拔地瞅了一眼。(3.6b.4)

(珍哥は晁大舍を憎々しげに睨んだ)

同音語“跋地”の例。

素姐怕他還有甚麼念將出來，再忍不住，將薛三省娘子跋地瞅了一眼。(44.12b.5)

(素姐は、奴がまだ何か唱え出すかと思って、もうこれ以上我慢ならず薛三省のかみさんを憎々しげに一目睨みました)

不曾　bùcéng

釈義：「[副詞]…していない、いまだ嘗て…ない」。現代共通語では一般に“没有;没(有)V过”。

《现汉》に“不曾”、“未曾”は「“曾经”の否定」(経験の否定)とする。しかし、厳密には“不曾”、“未曾”どちらも「経験の否定」と「動作行為の否定」の働きを有す。例えば、《应用汉语词典》の“不曾”に釈義“(1)某种情况或动作过去没有出现过(‘曾经’的否定)。(2)某种状态还没有发生(‘已然’的否定)”とする。同様に、“未曾”の釈義を“(1)不曾(‘曾经’的否定);(2)还没有”の如く各々二種類の釈義を掲げる。

《醒》などの旧白話では大多数が「“已然”の否定」(動作行為の否定)で、少数が「“曾经”の否定」である。

“不曾”は《现汉》、《古今》に釈義“没有(‘曾经’的否定)”で一般語語彙として収録。《漢語》に未収。《拼音词汇》に無標示で収録。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》等に未収。

“不曾”と“未曾”とはどちらも「<否定を表す成分>+<曾>」の形をとり、基本的には同じである。現代語においても、南方方言では「<否定を表す成分>+<曾>」の形を用いている。例えば、《汉方词》によれば次の如くである。

“唔□” [m̩˩tʻiɛn˩]	:(“□”の本字は“曾”)	:客家話 (梅県)
“伓曾” [eiŋ˧naiŋ˨˦(ts-)]	:	:閩語 (建甌)
“㑹” [fən˧]	:(“勿”と“曾”の合音字)	:呉語 (蘇州)
“未曾” [mei˧tʃʻɐŋ˨˦,mɛŋ˨˦]	:	:粤語 (広州)
“未曾” [mi˧naiŋ˨˦(ts-)]	:	:閩語 (建甌)

これらは方言音により漢字標記が異なるが、基本的には[<否定詞>+<“曾”>]である。この形は、歴史的には[“未曾”、“不曾”、“没曾”]であった。これが南方方言に現代でも残存しているのである。

《现漢方大》(p.486)に“不曾”(釈義[副詞]“没有”)の方言点を績溪とする。

《近代汉语虚词词典》に“不曾”(釈義“表示叙述的否定副词，意为‘没有’”)を収録。

《醒》の例。「“已然”(=“已经”)の否定」が多い。

扯出青梅的手來胗了脉，又見那青梅雖是焦黄的臉，倒不曾瘦的像鬼一般，…。(8.7b.6)

(“胗了”=“診了”)

(青梅の手を引っぱり出し脈を診た。かの青梅は血色悪い顔であったが、痩せて幽霊

のようという程ではない)

計老父子也不曾往家去,竟到了縣門口,尋着了寫狀的孫野鷄,與了他二錢銀子,央他寫狀。(9.12a.1)

(計老親子は家へ戻らないで県役所前へやって来た。訴状を書く孫野鷄を探し当て、二銭の銀子で訴状を書いて貰った)

況我們兩个雖定下了親,都還不曾娶得過門。(15.12a.4)

(私達二人とも婚約をしていますが、いずれもまだ嫁を迎え入れてはいません)

雖不是在武城縣裏,問的時節,着實有人奉承,却也不曾失了體面。(12.10a.8)

(武城県役所の中でのことほどではなかったとはいえ、尋問のときは確かにおもねる人も出てくれ、体面を失うこともなかった)

狄希陳心中暗道:"雖然不曾捉弄得他,喫他一席酒,又得了這个單方,也不枉費心一場。"(62.9b.1)

(狄希陳は心中暗に「先生をかつげなかったけれども酒の席を設けてくれるんだし、この民間処方も得たし、無駄な事をやった訳ではない。」と考えた)

狄希陳依舊不曾進房去吃。(45.6a.6)

(狄希陳は依然として部屋へ入ってご飯を食べません)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの["不曾" +V]の例。

婦人道:"我這兩日身子有些不快,不曾出去走動。"(《金瓶》85.7a.7)

(女は「私はここ二三日、体が少し具合わるかったので、出かけていませんでした。」と言った)

鳳姐…説:"…。可今娶姐姐二房之大事亦人家大禮亦不曾對奴説。…。"(《石頭》68.2a.2)

(鳳姐は…「…。今、お姉様をお妾さんとするという大礼すらも私には申されておりません。…。」と言った)

姑娘…叫道:"安公子,睡着了。"他…説:"不曾睡。"姑娘説:"既没睡,下炕來,…。"(《兒女》8.2b.3)

(娘は…「安坊ちゃま、眠っちゃたの?」と叫ぶと、彼は…「眠っちゃいないよ。」と答えた。娘は「眠っていないのなら、オンドルから下りていらっしゃい。…。」と言った)

また、疑問文の文末に用いる"不曾"は「"曾经"の否定」の例。出現数は少ない。

那个計氏,其父雖然是个不曾進學的生員,却是舊家子弟。(1.7a.9)("雖 "="雖然")

(かの計氏は、父親が科挙の試験に合格したことはなかったが、旧家の子弟でした)

疑問文の文末に用いる用法が現代中国語の"没有"に存在する。例えば《应用汉语词典》"没有"[副詞]"用在句末,表示客观的询问(不作主观的推测)"である。"不曾"が現代共通語の"没有"とほぼ同じならば、"不曾"にも疑問文の文末の"…不曾?"が存在するはずであ

る。旧白話では多い。太田辰夫 1958,p.393 はこの疑問文の文末におく形において「“没有”が準句末助詞として用いられるまでは“不曾”を用いた」という。

疑問文を形成する“…不曾？”の《醒》からの例。

晁奶奶道:“你見那新姨來不曾。”(7.5a.5)

(晁奥さんは「お前はその新しいお妾さんに会ったの？」と尋ねます)

任直道:“他們見過了那個遼東參將不曾。”姑子道:“這觀裏自來不歇客。那有甚麼遼東參將。”任直問:“他們三個還説甚麼不曾。”(22.16a.9)

(任直は「彼らはその遼東参将に会ったかい？」と申しますと尼は「この観にはこれまで客を泊めません。どうして遼東参将なんているのですか。」と答えます。任直は「彼ら三人はまだ何か言っていたか？」と尋ねます)

又看了薛如兼的説道:“你面試不曾。”(37.12b.8)

(薛如兼のものを読んで「お前は面接試験を受けたか？」と申します)

《金瓶梅詞話》からの例。

只是不敢來親近問,添了哥哥不曾。(《金瓶》76.15b.7)

(ただ、近くへ来て尋ねにくくてね。赤ん坊はできましたか？)

「判然としない気持ち」を表す“不知”(…かしら)と共に用いられる。

胡無翳道:“貧僧一則來與奶奶拜節;二則掛念着,不知添了小相公不曾。…”(22.7a.6)

(胡無翳は「拙僧、一つには奥様に新年のご挨拶を、二つにはお坊ちゃんがお生まれになられたか気になっておりまして。…。」と申します)

薛三省媳婦笑道:“俺小哥不知取了喜不曾。”(45.13a.9)

(薛三省のかみさんは笑って「うちのお坊ちゃんは花嫁さんと初夜を一緒になさったのですかねぇ。」と言った)

但不知他還有多餘不曾。若没有副餘,止他老婆的一件,好問他回買,…。(65.8a.8)

(ただ、あいつが余分に持っているかな？もし余分にはなく、単にあいつの女房のもの一つだと、あいつから買い戻しにくいし、…)

次日,素姐親自見了相主事,問道:“我要到皇姑寺一看,央他嬸子講説,不知講過不曾。”(77.11b.3)

(翌日、素姐自ら相主事に会い「私は皇姑寺へお参りに行きたいとあんたの奥さんに話してくれるよう頼んだんだけど、聞いてくれたかしら？」と尋ねます)

次に、「否定詞＋“曾”」の形では同じ意義なので“没曾”もここで立項する。

[参考]**没曾**　méicéng

副詞“没曾”は《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》、《应用汉语词典》等いずれにも未収。方言辞典類でも《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.2907)の“没曾”に釈義[副詞]“没有”で、方言点は西南官話(広西僮族自治区

宜山)のみ。この例文は“没曾打对靶子”(標的に当たっていない)を挙げる。

《金瓶梅词典》に“没曾”の釈義を“(1)不曾,表示曾经的否定。(2)用在反话问句里,表示曾经有过。(3)没有,用于询问。(4)不是,表示否定判断”、《红楼梦语言词典》に釈義“未曾”とする。《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。「動作行為の否定」が多い。

晁大舍又在監裏住下了,没曾出來。(14.11a.2)

(晁大舎は牢の中に泊まり、出て来なかった)

里長説:“你弟兄們没曾分居,那个是你哥的。”不由分説,鷹撮脚拿得去了。(28.2a.9)

(里長は「お前達兄弟は分家していないが、どちらが兄なんだ?」と言って有無を言わさず、しっかりと捕まえて行った)

薛夫人曉得是説這个,口裏没曾言語。(56.5a.2)

(薛夫人はそれが分かったが、口では何も言わない)

次に、「経験の否定」の例。下記例の最初の“没曾”は「経験の否定」であるが、第二番目の“没曾”は「動作行為の否定」ともとれる。

別説没曾見你,連耳朵裏聽也没聽見有你。你新來乍到的,熟話也没曾熟話,你就這們喬腔怪態的。(95.4b.10)

(あんたに会ったことがないばかりか、あんたの存在なんて聞いたことがないよ。新しく急にやってきて実際の話もしないであんたはもったいぶるのですね)

次は「動作行為の否定」か「経験の否定」のどちらともとれる例。

衆人齊道:“…。止有你狄希陳一个兒子,也是个老寔人,自求没聽見他興妖作怪,又會謀反。”素姐道:“他石會興妖作怪,没曾謀反。你們都是合他一夥的人,…。”(89.3b.5)

(“老寔”=“老實”)(“自求”=“自來”)(“石會”=“不會”)

(皆は揃って「…。狄希陳という一人息子がおり、大人しく真面目でこれまで変なことや謀反を起こすなんて聞いたことがないです」と申しますと、素姐は「あいつが妖術で攪乱することができなくて、謀反を起こしたことがないですって?お前達は皆あいつとぐるなのよ。…。」と言います)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》からの例。

家裡老婆没曾往那裡尋去,尋出,没曾打成一鍋粥。(《金瓶》46.13b.10)

(家の女房がそちらへ捜しに行かないかしら。そして、捜し出したら、めちゃくちゃにしなかったかしら)

幸而璉二爺不在家,没曾圓房,這還無妨。(《石頭》69.2b.7)

(幸い、璉の旦那様は家におられませんので、床入りしていません。したがって、このことは構やしません)

疑問文の文末に用いる“…不曾?”型が存在するが、同構造の“…没曾?”型の例は《醒》

に見られない。(なお、“…未曾？”型も見られない)。

因みに、《醒》における“…没？”型の話者は全て女性である。

再説薛夫人…説道:“你梳上頭看看姐姐去,看他今日黑夜作怪來没。”(45.12b.9)

(さて薛夫人は…「お前、髪の毛をときにあの子を見に行っておくれ。あの子が夜また変なことをしでかしたかを。」と言いました)

周奶奶説:“你給他,可他媳婦兒見來没。”(49.11b.8)

(周奥様は「あなたがあげたのならそのお嫁さんは見たでしょう？」と言った)

相于廷娘子道:“你説没有劈的,　家的尤厨子是怎麽來。”素姐説:“你知道他是劈來没。…。”(60.9a.4)

(相于廷のかみさんは「雷に撃たれた事等ないと言うの？うちの尤料理人はどうなのよ？」と申しますと素姐は「あいつが雷に撃たれたのかあんた知っているの？…。」と言った)

薛三槐娘子説:“…。狄大爺合狄大娘起來了没。”(45.2b.10)

(薛三槐のかみさんは「…。狄旦那さんと奥さんは起きられましたか。」と申します)

狄婆子…問説:“做了中飯没。做中了拿來吃”(40.9b.4)

(狄奥さんは…「ご飯はできたかい？できたなら持ってきて。食べますから。」と言いました)

待中　dàizhōng

釈義:「[副詞]まもなく…する」。現代共通語では一般に“快要;眼看”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。

方言辞典類では現代山東方言の語彙を集めた《山东》によれば、“待中”(釈義“刚刚打算;正要”)の方言点は山東省北部の桓台である。胡適「考証」に釈義“快要”とする。

《汉方常》、《北京话》、《现代北京》、《現漢方大》(p.2792)に“待中”は未収。

《基本词汇集》(p.4250)の詞目“快”(他走了～两年了)項で“待中”を指す方言点は無い。

《汉方大》(p.4283)に釈義“快要”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)とする。

近世語辞典類では《例释》に釈義“就要;快要”を《聊斎俚曲集》、《醒》第四十八回より挙例。《百部小说》、《近汉》に収録。《古方言》(p.59)に“待中”を聊城方言に現在でも存在するというが、その地はやはり魯北区域に位置する(“今山东聊城方言尚有此语”)。“待中”は、山東方言といえども、同じく山東方言が多いとされる《金瓶梅詞話》には見えず、《聊斎俚曲集》等に見られるだけである。《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

薛三槐媳婦説:“這是五更。待中大飯時了。”(45.3b.1)

(薛三槐のかみさんは「五更<早朝五時頃>だって？まもなくご飯時ですよ！」と言いました)

張大嫂,你還不快着去哩。狄大官娘子待中把張大哥使棒椎打殺呀。(66.8b.3)

(張奥さん、あんた早く行かなきゃ！狄奥さんが張兄貴を棍棒でぶち殺そうとしていますよ！)

察院待中上堂,你快着寫罷。(81.13b.7)

(察院殿はまもなく役所にお出になられる、早く書いてくれ)

到反 dàofǎn (倒反)

釈義:「[副詞]反対に、かえって」。現代共通語では一般に“反倒;反而”。

《现汉》、《古今》、《补》ともに未収。《漢語》に“倒反”(釈義“出於意外之意”)で一般語語彙として収める。《拼音词汇》に<方>符号を付して収録。“反倒”、“反而”は無表示で収録。

方言辞典類では《吴》に“倒反”(釈義“反而;反倒”)を《九尾龟》等より挙例する。《汉方常》に“倒反”(釈義[副詞]“反倒”)を呉方言として魯迅《怎么写》より挙例。

“倒反”は呉方言であるゆえ、北方語系辞典の《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》等に未収。

《汉方大》(p.4921)に“倒反”(釈義“反而;反倒”)の方言点を東北官話(東北)、呉語(上海市、浙江省紹興、蒼南金郷、杭州、平陽)とする。なお、“倒反”は未収。

“倒反”は“反倒”の逆序語である。逆序語は呉語、客家語、粤語、閩語などの南方諸方言に多い。例えば、常用される逆序語を挙げるのに枚挙にいとまがない。逆序語の例(カッコの中は北方語):

“欢喜”(=喜欢)、“爽直”(=直爽)、“闹热”(=热闹)、“道地”(=地道)、“该应”(=应该)、“鸡公”(=公鸡)、“狗公”(=公狗)、“牛公”(=公牛)、“人客”(=客人)など。

《現漢方大》(p.3233)に“倒反”(釈義“反而,表示跟上文意思相反”)の方言点を丹陽、杭州とする。また、“倒反(而)”(釈義“反倒;反而”)の方言点を揚州とする。

近世語辞典類では《红楼梦语言词典》に“倒反”(釈義“反而;反倒”)を収録。

《例释》、《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》に未収。

《醒》の例。

…,與李成名吃。李成名道:“請不將蕭老爹去,到反取擾。”(4.11a.9)

(“到反”=“倒反”)

(…。李成名に食べさせます。李成名は「蕭先生をお招きできなかったからですが、逆にご面倒をかけますね。」と言いました)

《石頭記》からの例。

鳳姐忙道:“連你還這樣開恩操心呢。我到反袖手旁觀不成。…。”(《石頭》72.7b.8)

(“到反”=“倒反”)

(鳳姐は慌てて「あんたまでこんなに情けをかけ、心配をして下さっているのよ。逆に私が高見の見物とできるものですか。…。」と言った)

《兒女英雄傳》では“反倒”を採用し、“倒反”は未収。

高低　gāodī

釈義：「[副詞]いずれにしても、どうであれ、どのみち」。現代共通語では一般に“不管怎样;无论如何”。

“高低”(釈義“不管怎样;无论如何”)は《现汉》、《漢語》に一般語語彙、《古今》に方言語彙として収録。ただ、《拼音词汇》に見える“高低”は、別義(「高低」)のものであろう。

方言辞典類では《山东》(釈義“(1)无论如何(2)终于;最终”)、《北京话》、《现代北京》(釈義“(1)到底;最终。(2)无论如何”)に収める。《吴》に未収。

《現漢方大》(p.3350)に“高低”(釈義“副詞,無論如何,怎麽也<多用於否定>”)の方言点を哈爾濱、済南、牟平、西安、南昌、萍鄉、揚州、南京、武漢、洛陽、萬榮とする。

《汉方大》(p.5023)に釈義(1)“终究;到底”の方言点を東北官話(東北)、冀魯官話(山東省城聊城)、中原官話(江蘇省徐州。安徽省阜陽)、釈義(2)“一定”の方言点を贛語(江西省)、また、釈義(3)“坚决;执意”の方言点を中原官話(山東省平邑)とする。このうち、釈義(1)が該当する。

近世語辞典類では《例释》、《古方言》、《金瓶梅詞話》に未収。《红楼梦语言词典》にもこの用法は未収(釈義“(1)高和低的相对位置。(2)指人的地位、品格的高下。(3)指才能的深浅”しか無い)。

《醒》の“高低”は、釈義“不管怎様;無論如何”の例が多い。その例。

> 你只説是那裏見來,或是聽見誰説,我好到那裏刨着根子,就使一百千錢,我高低買一套與你。(65.2a.6)
>
> (お前、どこで見たというんだ。或いは誰かが言っているかを聞いたのか。もし、そういうことがあるなら私はそこへ行って草の根分けてでも、百両、千両のお金を使ってでも、どのみちお前に一揃い買ってやる)
>
> 我從小兒不好吃獨食,買個錢的瓜子炒豆兒,我也高低都分個遍。(87.6b.5)
>
> (私は小さい頃から独り占めするのが嫌いで、スイカの種や炒り豆を買ったときでも全て他の人に分けてきた)
>
> 没有上門怪人的理。我高低讓狄大嫂到家吃鐘茶兒。(89.1274.3)
>
> (人の家へやってきて、咎めだてすることはないでしょう。私はどうしても狄姉さんに家の中へ入って貰ってお茶でも差し上げたいのです)

また別に名詞用法“深浅轻重”または“优劣;高下”が存在する。これは一般語としての用法である。

釈義“深淺輕重”を示す例。

> 那个李成名的娘子一些眉眼高低不識,叫那晁住的娘子來問他量米做晌午飯。(11.4a.1)
>
> (その李成名のかみさんは少しものごとの情況が読めない人でした。晁住のかみさん

を呼んでどれくらい米を量って昼御飯を作るのか珍哥に尋ねてほしいと頼んだ)

釈義“優劣”を示す《醒》の例。

我自巳單身降不起你麼。單只架落着七叔降人。今日七叔没在這裏,偕兩个就見個高低怕一怕的不是那人屁裏生的。(32.8a.4)(“自巳”=“自己”)

(わし自身独りでお前を負かせないとでもいうのか?七叔をおだてて加勢して貰ってはじめて人を負かせるのだと?今日は七叔がここにいないのだから、わしら二人は決着をつけてやろうじゃないか。怖がる奴は人の腹から生まれた男じゃねえ!)

《兒女英雄傳》の“高底”は全て釈義「優劣」でしかない。

これ以外に、“高低;高下”には、別の釈義[副詞]“到底;终究”(つまるところ、結局)がある。これは、《现汉》に方言語彙として、《漢語》に一般語語彙として収める。方言辞典類では《汉方常》に北方方言として雑誌《安徽文学》、评书《云翠仙》より挙例。《山东》、《北京话》にも収録する。《汉方大》にこの釈義で、東北官話、冀魯官話、中原官話とする。

還許 háixǔ (許)

釈義:「[副詞]もしかして(…かもしれない)、もしかすれば(…かもしれない)」。現代共通語では一般に“或许;也许;可能;恐怕”。

太田辰夫 1988,337 は《兒女英雄傳》に出現する“還許”、“也許”の項で「“許”だけでも推測の意を表すが、これに副詞“還”、“也”がついたもの」とする。なお、太田 1958,297「推測」項に“還許”、“許”を《兒女英雄傳》、《紅樓夢》より挙例。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも“还许”は未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《山东》に“还许”(釈義“也许;可能”)を省内方言点青州とする。

《北京话》、《现代北京》、《北京方言》、《汉方常》、《河北方言》、《吴》に“还许”を未収。

《基本词汇集》(p.4502)の詞目“也许”項で“还许”を指す方言点は無い。

《汉方大》に“还许”(釈義[副詞]“也许”)の方言点を東北官話(東北)、冀魯官話(山東省淄博)、中原官話(山西省臨猗)、晋語(山西省静楽、柳林)とし、《醒》第五十七回、康濯《我的两家房东》より挙例する。

《現漢方大》(p.5723)に“還許”(釈義“也許”)の方言点を済南とする。

近世語辞典類では《考论》に“还许”を収録。《近代汉语虚词词典》に“还许”(釈義“表示揣测的语气副词,意为‘也许’”)を《醒》第五十七回より挙例。

《例释》、《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》に“還許”は未収。

《醒》の例。下記の“還有許…”を黄肅秋校注本では“还许有…”の語序にする。上記《汉方大》、《近代汉语虚词词典》の引用例はいずれも“还许有”の語序である。

又叫春鶯説:“你去尋尋,還有許他二爺小時家穿的褲子合布衫子,尋件給他換上。”(57.9a.9)

(また、春鶯を呼んで「お前、ちょっと捜しておいで。ひょっとしたら、うちの子の

小さい頃身につけていたズボンと綿のシャツがあるかもしれないから、着換えさせておやり。」と言いました)

《兒女英雄傳》からの例。

到了太太十分分不開身,只那個長姐兒偶然還許伺候戴一次帽子。(《兒女》35.24b.5)

(奥様がとても忙しく手が離せないときは、長姐児が時に帽子の用意をさせて戴けるのです)

鄧九公道:"…。那戲兒一齣是怎麽件事,或者還許有些知道的,曲子就一竅不通了。…。"(《兒女》32.5a.10)

(鄧九公は「…。その芝居はどういう内容か或いは少しは知っているかもしれないんじゃ。でも、歌になれば皆目わからんでな。…。」と申します)

好生　hǎoshēng

釈義:「[副詞]①とても。②よく、十分に」。現代共通語では一般に"①很。②好好儿地"。

《现汉》に釈義"(1)多么;很;极。(2)好好儿地"の両方ともを方言語彙とするが、《古今》は上記釈義①を近世語語彙として、②を方言語彙とする如く、分けて収める。《漢語》に上記釈義①を《元曲選》より、②を《紅楼夢》より挙例するが、両者を一般語語彙として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》に[副詞]と注記して収める。

方言辞典類では《汉方常》に上記釈義②のみを北方方言、贛方言とする。《现代北京》は上記釈義②を収める。

《北京话轻声词汇》に"好生"を軽声語とする。そこでの例は"好生看着,别洒了。"(こぼさないように良く見ていてね)となる故に上記釈義②である。

《徐州方言志》に文字のない同音語"好□"[xɔ^{35}ʂaŋ^{55}](釈義"好好地")を収録。

《山东》、《吴》に未収。《汉方词》の詞目"很"の項で"好生"を指す方言点は無い。

《汉方大》(p.2319)に上記釈義②"好好儿(地)"の方言点を東北官話、北京官話、冀魯官話、中原官話、江淮官話、西南官話、湘語、贛語とする。広範囲にわたるが、呉語、客話、粤語、閩語の南方諸方言には見られない。なお、上記釈義①は未収。

《現漢方大》(p.1589)に"好生"で釈義"好好儿地"の方言点を済南、長沙とする。釈義"好好儿"の方言点を成都とする。釈義"好好地"の方言点を柳州とする。"好生(子)"(釈義"好好儿地")の方言点を南昌とする。"好生(仔)"(釈義"好好儿地")の方言点を萍鄉とする。"好生(儿)"(釈義"好好儿地")の方言点を哈爾濱とする。

近世語辞典類では《例释》に"好生"(釈義"很好地;好好儿地。义同'好上'")を《真本金瓶梅》、《宝剣记》、《醒》第七十四回より挙例。また、"好生着"(釈義"好好儿的")で《聊斎俚曲集》より挙例する。

《方言俗语》(p.273)に釈義"好好地"で《金瓶梅》、《三遂平妖传》より挙例する。この按語に"今四川话仍有此语。徐州话'好生'音转为háoshāng"という。

《金瓶梅词典》に釈義“(1)很;非常。(2)好好儿地。(3)多”、《红楼梦语言词典》に釈義“(1)好好儿地。(2)非常;多么。(3)嘱咐小心谨慎”とする。『山東方言の調査と研究』(p.84)では“好生”を釈義“好好的”のみ挙げる。

上記釈義①の場合。《醒》では同義語“很”、“狠”(=“很”)も用いるが、むしろ“好生”の方が優勢。“好生”の例。

晁源甚是乖張,晁老又絶不救正,好生難過。(16.8b.10)

(晁源はとても人情にもとる奴で、父親の晁老はそういう息子を改められず、とても困っています)

梁、胡二人見晁老父子俱在面前,這包銀子好生難處,又不好説夫人已經賠過,…。(17.13b.6)

(梁、胡の二人は、晁親子が共に面前にいるので、その包みの銀子の処置にとても困った。また、夫人が既に償って返してくれたとも言えなくて、…)

薛教授夫妻娶了連氏過來,叫自巳的女兒素姐形容的甚是賢惠,已是喜不自勝;今又得巧姐恁般賢淑,好生快樂。(59.9b.4)(“自巳”=“自己”)

(薛教授夫妻は連氏を娶り、自分のむすめ素姐よりもとても賢淑だったので、うれしさを抑え切れない。そして、今、また、巧姐のような良妻賢母を得てとても幸せです)

《兒女英雄傳》からの例。

這老頭兒這一愣,愣的好生叫人不解。(《兒女》40.3b.7)

(この親父さんはぼんやりしていますが、他人には全く何の事か分かりません)

上記釈義②“好好兒地”の場合。《醒》では同義語“好好兒的”も用いるが、“好生”の方が優勢。“好生”の例。

陳公叫人把艾虎合八哥用心收着,讓童奶奶到炕房暖和,好生待飯;…。(71.9a.7)

(陳公は、人に艾虎と九官鳥を注意深くしまわせ、童奥さんにオンドルのある寝室へ行って暖をとってもらい、きちんとご飯でもてなした)

又分付別的囚婦,教他們:“好生服事,不許放肆。…。”(14.7a.1)

(また別の女囚に言いつけた「よくよく世話をするんだ。好き勝手な事は許さんぞ。…。」)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。釈義は“好好儿地”。

我教你好生看着孩兒,怎的教猫唬了他。(《金瓶》59.12b.3)

(よくよく赤ん坊を見ていてくれと頼んだのに、どうして猫ちゃんなど脅かされたのだ?)

襲人…説道:“你先好生梳洗了,換了出門的衣裳來。…。”(《石頭》37.10a.7)

(襲人は…「あんたは先ずちゃんと髪や顔も整え、お出かけ用の着物に着替えてよ。…。」と言った)

快給大爺賠個不是，説等鳳兒大了好生孝順孝順大爺罷。(《兒女》19.19b.8)

(早く叔父さんに非を詫びなさい。そして、大きくなったらよくよく仕えると言いなさい)

釈義“很”の場合。《金瓶梅詞話》からの例。

春梅道：“俺娘爲你這幾日心中好生不快，…。”(《金瓶》83.7b.2)

(春梅は「うちの奥様は、あなたの為にここ何日間か気分がとてもすぐれないのよ。…。」と言った)

虎辣八　hǔlàbā　(忽拉;忽拉巴;忽爾巴;忽剌巴兒)

釈義：「[副詞]突然、急に」。現代共通語では一般に“忽然;突然”。

《现汉》、《漢語》、《补》いずれにも未収。《古今》に“忽剌巴”(釈義“忽然”)と作り近世語語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“忽剌”[hūlā](釈義[副詞]“忽然”)で山東等地方言とし、《真本金瓶梅》より挙例。また、“忽拉巴儿”(=忽剌巴儿”)[hūlabār]で北方方言とし、管桦《将军河》、梁斌《红旗谱》より挙例する。

《山东》は“忽拉;忽拉巴;忽尔巴”などと作り、《徐州方言志》は“忽拉”を収録する。また、《现代北京》は“虎拉巴儿”と作る。

《汉方大》(p.3533)に“忽拉”(釈義“忽然”)の方言点を東北官話(東北)、中原官話(山東省郯城。江蘇省徐州)、同音同義語“忽剌”の方言点を冀魯官話(山東省)とする。同書(p.3339)に“虎拉巴儿”(釈義“突然;猛然”)の方言点を北京官話(北京)で“虎喇巴儿”とも作るとする。同書(p.3536)に“忽拉扒”の方言点を東北官話(遼寧省義県)とする。他に、“忽剌八”の方言点を単なる官話、“忽喇巴”の方言点を単なる官話とする。“虎辣八”、“虎拉巴”は未収。

《現漢方大》(p.2199)に“虎辣八”は未収。同書(p.2322)に“忽拉”(釈義“猛然;一下子”の方言点を徐州とする。“忽喇”(釈義“抽泣”)、“忽辣”(釈義“潑辣地幹或做”)では釈義が異なる。

近世語辞典類では《例释》に“忽剌”(釈義“忽然”)で《真本金瓶梅》より挙例。《方言俗语》に“忽剌八”(釈義“忽然”)を按語で“明·沈榜《宛署杂记》:‘仓卒曰忽喇叭’。清·高某《正音撮要》:‘忽喇巴即忽然间’”とし、《金瓶梅》、《云梦窗》、《醒》、《红楼梦》より挙例する。ところで、《近汉》はこの語を蒙古語だとする。

《金瓶梅词典》に“忽剌八”(釈義“蒙古语译词，《华夷译语》作‘忽儿八’,突然的意思。明·沈榜《宛署杂记》:仓卒曰忽喇八’”)を収録。

《醒》では同義語“忽然”が極めて優勢。他に“突然”、“突地”、“忽”、“忽辣八”も用いる。“忽辣八”の例。黄肅秋注に釈義“忽然、突然。亦作忽剌八”とする。

嘗時只喝一口黄酒就醉得不知怎様的，這燒酒是聞也不聞。他虎辣八的，從前日只待喫燒酒合白鷄蛋哩，没好送給他喫。(45.9a.1)(“嘗時”=“常時”)

（いつもはもちアワで作った醸造酒を一口飲むだけで酔っぱらって前後不覚になります。こんな焼酎は臭いをかぐことすらしません。ところが、若奥様は急にこの間から焼酎とゆで卵をほしがるのです。送り届けないのは具合悪いですし）

《金瓶梅詞話》、《石頭記》からの例。

今日忽剌八，又冷鍋中荳兒爆。（《金瓶》68.19b.4）

（今日は突然なんだね。冷たい鍋の中で豆がはじけたようなもんだよ）

鳳姐…笑道："…。忽喇巴的反打發個房里人來了。…。"（《石頭》16.5b.3）

（鳳姐は…笑って「…。突然、逆にお部屋さんを使いに寄越されたですから。…。」と言った）

渾深 húnshēn （渾身）

釈義：「[副詞]どうせ、どのみち」。現代共通語では一般に"横竪;反正"。

《现汉》、《古今》、《漢語》いずれも"渾身"と作り"全身"と釈義、一般語語彙で収録する。しかし、副詞（「どうせ、どのみち」）の意義用法は未収。《补》にも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に"渾深"と作り釈義"反正"、山東方言で《醒》より挙例する。

《北京话》にこの意味では未収。《山东》には"反是"、"横竪"、"早晚儿"等を収録するが、"渾深"は未収。

《汉方大》(p.4421)に"渾身"、"渾深"（釈義"反正"）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《汉方词》の詞目"反正"の項で"渾深"を指す方言点は無い。

《現漢方大》は基本的に虚詞を収録しないゆえ、未収。

近世語辞典類では《例释》に"渾深"（釈義"反正"）を《醒》第十九回、八十回より挙例。また、"渾身"と作り《醒》第四十一回より挙例。《古方言》の按語に"'渾深'是'横竪'之音。急言为'渾'。'渾是'也可说成'横是'，可资佐证"とする。《近汉》、《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》からのにこの意味では未収。

《醒》では同義語"反正"、"横竪"が未検出。"渾身"の例。

言姐道："你去對爹說，你說下來了，我有好到你；你要說不下這事來，你渾深也過不出好日子來。"（68.8b.4）（"言姐"＝"素姐"）

（素姐は「あんたはお義父さんに言うんだね。言って納得させてくれたならよくしてあげるけれども、そうでなければ、どのみちまっとうな生き方はできないよ。」と言いました）

我計的往你家來時，衣裳穿不了，青表藍裏梭布夾襖，藍梭布褲，接去的媳婦子還夾拉着來了，這渾深不是你晁家做的，你也做主燒了罷。（92.11b.5）（"計的"＝"記的"）

（わたしゃ覚えちゃいるが、おっかさんがあんたの家に来たとき黒い表で裏が青の木綿布裏付の上着と青色木綿のズボン、これは迎えに出た下女がなおもわきの下にかかえ

て持って行きましたよ。この分は、どのみちあんたの家でこしらえたものではないでしょう。それでもあんたの一存で葬礼に焼くというのかえ？）

《醒》では“渾深”と作るのが多いが、時に“渾身”とも作る。黄肅秋注に釈義“这里作横竖、反正、横了心的意思”とする。その例。

抗着偺那榖,不希罕使他的。看我餓殺不。留着偺秋裏蔭棗麸,也渾身丢不了。晁淳。晁鳳。偺留着,慢慢的筭帳,再看本事。(32.13a.9)(“抗着”＝“扛着”)

(俺達のコメをかついで行け。あんな人のをありがたがるものか！ワシが餓死するとでも思うのかい！ワシらの秋の干しナツメをしまっておくんだ。どうせ捨てる物ではないんだぜ。晁淳！晁鳳！見ておれよ。ゆっくりと落とし前をつけてやるからな。ワシの力を見せつけてやる！)

しかしながら、一般に《醒》での“渾身”は“全身”の意義用法である。

“全身”の意義では《北京话》にも収録する。なお、《汉方大》に釈義[副詞]“完全”で呉語(上海)とする(釈義“全身”が未収であるのはこの釈義が既に共通語となり得ているとみなすからであろう)。《現漢方大》(p.4533)に釈義“全身”の方言点を済南、揚州、南京、武漢、西安、上海、蘇州、杭州、南昌、寧波とする。

《醒》での“渾身”＝“全身”の例。

直到那掌燈的時節,漸漸的省來,渾身就如綑綁了一月,打了幾千的一般痛楚,…。(11.7b.2)(“綑綁”＝“捆綁”)

(灯をともす頃になり、だんだんと正気が戻ってきました。全身がまるで一ヶ月も縛られた、また、何千回も叩かれたような苦痛があった。…。)

晁夫人唬得通身冷汗,心跳得不住,渾身的肉顫得葉葉動不止。(20.2b.4)

(晁夫人はびっくりして全身冷や汗をかき、心臓はドキドキと早鐘を打ち、全身の肉はどれも震えて止まりません)

《金瓶梅詞話》、《紅樓夢》、《兒女英雄傳》からの例。釈義は「全身」である。なお、《石頭記》の同一箇所では“渾身”を削除している。

今早見你妖妖嬈嬈,搖　的走來,教我渾身兒酥麻了。(《金瓶》53.5b.3)

(今日の朝、あなたのなまめかしくしゃなりしゃなりと歩いてくるのを見て、ボクは全身がしびれちゃいました)

薛蟠…不容分説,便劈頭劈面渾身打起來。(《戚序本》80.6b.8)

(薛蟠は…有無を言わさず、真正面から全身打ち始めた)

渾身上下本就只一件短襖,一條褲子。(《兒女》9.10a.2)

(体には腰までの短い上着とズボンのみでした)

尖尖　jiānjiān

釈義：「[副詞]思い切り、十分に、完全に」。現代共通語では一般に“狠狠；足足”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにもこの意味では未収。

方言辞典類では《山东》に非軽声語で釈義“足足;整整”を収録する。山東方言である。

《汉方常》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《徐州方言志》、《吴》等に未収。

《汉方大》(p.1873)に釈義[形容詞]“足足;很满”で冀魯官話(山東省淄博)とし、《醒》より挙例する。

《現漢方大》(p.1342)に“尖尖”の釈義“狠狠;足足”は未収。

近世語辞典類では《例释》に釈義“这里有足足的意思。尖尖,很满”とし、《醒》第三十五回より挙例。《百部小说》に釈義(“(1)足足。(2)狠狠”)を細分化させている。

《方言俗语》、《古方言》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“足足”も多く用いるが、“尖尖的”も同様に多く用いる。“尖尖”の例。

剛剛睡得兩夜,十六日放告的日子,叫他在巡道手裏尖尖的告上一狀,説他奸霸良人婦女。(63.2b.2)

(二晩寝たばかりで十六日は訴えを聞く日でした。巡直の手で彼は良民の女性を力づくで奪い取ったと、しっかり告訴されていました)

自巳把嘴每邊打了二十五下,打得通是那猢猻屁股,尖尖的紅將起來。(11.5b.4)

(“自巳”=“自己”)

(自分自身で口のあたりを二十五発たたきますと、サルのお尻のように完全に赤くなりました)

拔了四枝簽,把晁鳳尖尖的打了二十。(46.11a.6)

(罪人を打つ刑具四本を引き出し、晁鳳をこっぴどく二十発叩いた)

《金瓶梅詞話》では釈義が「細くとがっている」を示し、異なる。その例。

尖尖玉手。(《金瓶》98.7b.11)

(細くて玉のような手)

交頭 jiāotóu

釈義:「[副詞]まるまる」。現代共通語では一般に“整整;足足”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.1516)に釈義“整整”は未収。

《汉方大》(p.2170)は釈義[形容詞]“整整”の方言点を単なる官話とし、《醒》第二十八回より挙例する。

近世語辞典類では《例释》に釈義“整整”で《醒》第二十八回より挙例。《百部小说》に収録。

《古方言》(p.134)は《醒》第二十八回の例の釈義を“指新年与旧年相交替”とし、不適切である。《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“足足”が極めて優勢。時に“交頭”も用いる。“交頭”の例。

却用煤炭如拳頭大的燒得紅透,乘熱投在水中,每甕一塊,將甕口封嚴,其水經夏不壞,烹茶也不甚惡,做極好的清酒,交頭吃這一年。(28.8a.9)

(こぶし大で真っ赤に焼けた石炭を熱いうちに水中に投げ入れる。どのカメにも一つ入れ、カメの口を固く封しますと、その水は夏を経ても悪くはならず、お茶を入れてもさほど悪くなく、特に良い酒を作れ、まるまる一年は飲める)

看看　kānkān　(堪堪)

釈義①:「[副詞]徐々に、だんだんと」。現代共通語では一般に“漸漸”。これは「近未来」を示すのではなく、下記釈義②と異なる。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.4227)に“看看”(釈義“漸漸”)の方言点を冀魯官話(河北省雄県。山東省)、中原官話(河南省南陽)、閩語(海南省文昌)とする。

《現漢方大》(p.2737)の“看看”(釈義“用眼睛觀察”、“眼看”など)は釈義が異なる。

近世語辞典類では《例释》に“看看”[kānkan](釈義“漸漸”)を《水滸》、《真本金瓶梅》、《醒》第二十九回より挙例。《金瓶梅词典》に“看看”[kànkan](釈義“漸漸”)を収録。

《百部小说》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

上記釈義①「徐々に、だんだんと」を示す場合。《醒》では同義語“漸漸”を用いるが、“看看”も用いる。その例。

原要自巳管了店,叫薛三槐去買米,不料舖中圍了許多人在那裡買布,天又看看的晚了,只得拿了幾十文錢,叫冬哥提着籃,…。(29.11b.10)(“自巳”=“自己”)

(もともと自分で店を切り盛りし、薛三槐にコメを買いに遣らそうとしたが、思いがけなくも店の中はたくさんの人が布を買っており、空も徐々に暮れてきた。仕方なく何十文かの銭を持ち冬哥を呼んでかごを手に持たせ、…)

寄姐看看的臉就合蠟渣似的黄,脚下一大窪水。(81.1b.1)

(寄姐は徐々に顔が蝋燭の残りかすのように黄色くなり、足もとには沢山の水を垂らしました)

《金瓶梅詞話》、《兒女英雄傳》からの例。

面如金紙,體似銀條,看看減退豐標,漸漸消磨精彩。(《金瓶》61.21b.1)

(顔は金の紙の如く、体は銀の棒に似たり。だんだんとふくよかな美しさも減退し、徐々に精彩も消えてくる)

看看天色已晚,安家父子、鄧家翁婿依然回了褚家莊。(《兒女》21.24b.9)

(徐々に空は暗くなってきたので、安家親子、鄧家岳父と娘婿は元通り褚家荘へ戻った)

釈義②：「[副詞]見てる間に、まもなく、今にも、すぐにも」。現代共通語では一般に“眼看着;马上;立刻;将要”。これは上記釈義①に対して「近未来に発生する」ことを示す。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に釈義“同‘堪堪’,行将之意。唐人诗词多用此语”とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に釈義“立刻;马上”で“立马”、“眼看眼”等と共に収録。

《汉方常》、《现代北京》に未収。

《基本词汇集》(p.4507)の詞目“眼看”(～天就黑了)項で“看看”を指す方言点は邯鄲、臨河、赤峰、二連浩特、黒河、斉斉哈爾、商丘、西安、蘭州、武漢、合肥、徐州、連雲港、漣水、揚州とする。

《汉方大》(p.4227)に“看看”(釈義“将要;马上”)の方言点を冀魯官話(山東省)、呉語(江蘇省蘇州)とする。

《現漢方大》(p.2737)に“看看”(釈義“眼看；馬上”)の方言点を徐州、揚州、崇明とする。

近世語辞典類では《例释》“看看”[勘勘](釈義“将要”)で《聊斎俚曲集》、《蒲松齢集》より挙例《百部小说》、《古方言》に収録。《金瓶梅词典》に“看看”[kànkan](釈義“眼看;将要”)を収録。《红楼梦语言词典》に“看看”(釈義“同‘堪堪’。表示即将到某一时刻;转眼”)を収録。“看看”は“堪堪”とも作る。

《方言俗语》に未収。

《醒》では同義語“立刻”、“將要”、“眼看”を用いるが、“堪堪”も(=“看看”)用いる。その例。

昨日翰林院門口一家子的個女兒,叫一個狐狸精纏的堪堪待死的火勢,…。(6.8b.8)

(昨日、翰林院の入り口にある一軒の家の娘が狐の化け物に憑かれて間もなく死ぬという有様となった。…)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。“看看”は同音語“堪堪”とも作る。

却説大金人馬搶過東昌府來,看看到青河縣地界。(《金瓶》100.9a.10)

(さて、大金の軍は東昌府をかすめ取り、みるみるうちに清河県の地へとやって来ました)

看看三日光陰,那鳳姐和寶玉倘在床上,…。(《石頭》25.10b.3)(“倘在”=“躺在”)

(みるみるうちに三日経ちましたが、鳳姐と宝玉は寝台に横になったままでして、…)

也曾百般醫治祈禱,問卜求神,皆無效驗。堪堪一日落。(《石頭》25.10a.3)

(様々な医者、祈祷、占い、神頼み等行いましたが、一向に効き目がありません。みるみるうちに日も暮れてしまいました)

見那太陽已經銜山,看看的要落下去。(《兒女》5.14b.4)

(太陽は既に山に掛かっており、みるみるうちにまもなく沈んで行きます)

可可(的)　kěkě(de)

釈義：「[副詞]ちょうど良い、うまい具合である、こともあろうに」。現代共通語では一般に“恰好;恰巧;刚好;正好”。“可可”は儿化語“可可儿的”とも作る。《近汉》は儿化語にすれば“更口语化”というが、《醒》に儿化語“可可儿的”は未収。

《现汉》に“可可儿的”で釈義“恰巧;不迟不早,正好赶上”を方言語彙として、《漢語》に“可可(兒)的”で一般語語彙として、《古今》に“可可(儿)”で方言語彙として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》に“可可儿的”で〈方〉符号を付して収める。

方言辞典類では、《汉方常》に儿化語“可可儿的”(釈義[副詞]“恰巧;正好”)で北方方言とし、《归来的儿子》、雑誌《人民文学》より挙例。《山东》に“可可”(釈義“恰恰”)の省内方言点を陽谷とする。《河北方言》、《现代北京》にも収録する。

《基本词汇集》(p.4496)の詞目“刚好”(～十块钱,不多不少)項で“可可儿”を指す方言点は陽原とする。

《汉方大》(p.1174)に“可可”(釈義[副詞]“恰恰；恰巧；合适”)の方言点を膠遼官話(山東省安丘)、中原官話(山西省吉県、運城)、江淮官話(江蘇省塩城)とする。また、“可可的”(釈義“恰好;刚巧”)の方言点を晋語(山西省長子)、江淮官話(江蘇省北部)、西南官話(雲南省昭通)とする。

《現漢方大》(p.888)に“可可的”(釈義“正好;恰巧”)の方言点を銀川とする。同義語“可可兒”(釈義“恰好;不多不少”)の方言点を牟平とする。また、“可可底”(釈義“恰巧;不遲不早,正好趕上”)の方言点を太原とする。

近世語辞典類では《例释》に“可可”(釈義“恰恰;恰巧”)を《醒》第二十九回、《真本金瓶梅》より挙例。

《方言俗语》(p.156)に《金瓶梅》、王梵志《经纪须平直》诗、《灰阑记》、《西游记》、《破窑记》、《醒》、《儿女英雄传》より挙例。その按語に“北京、南阳、大同等方言均有此语”とする。《古方言》も儿化をいう(按語“今河南南阳方言‘可可’儿化,说成‘可儿可儿’”)。

《金瓶梅词典》に“可可”(釈義“(1)恰恰;偏偏。(2)(～儿的)表示不合情理;哪里能够”),又作“磕磕”を収録。

《醒》の例。ここの例全部が「不遇」を示すゆえ「こともあろうに、あいにく」と解釈しなければならない。

又揭了重利錢債,除還了人,剩下的,打發兒子上京,可可的又不中進士,揭了曉,落第回來。(35.11a.4)

(また高利貸しの借金をきれいに人に返済します。残った分で息子を上京させるも、あいにく進士に合格せず、発表は落ち、帰ってきます)

怎麼來這們年小的三位相公,可可的都一齊没了。甚麼病來。(74.12b.6)

(どうしてこんなにも若い三人の殿方があいにく揃って亡くなったのですか！何の病ですか？)

手裏空乏,一个錢也没有。可可的造化低,把个丫頭又死了。調理,取藥,買材,雇人,請陰陽洒掃,都是拿衣服首飾當的。(80.5a.6)

(懐具合が寒くて一銭の金もない。丁度運悪く、小間使いを死なせた!死体を調整、薬を配合し、棺桶を買い、人足を雇い、陰陽師を呼んで床を掃除して貰った。これらは全て着物や首飾りを質入れした金です)

《金瓶梅詞話》、《兒女英雄傳》からの例。《金瓶梅詞話》では“可可、可可的、可可兒、可可兒的”の使用が多い。同音語“磕磕”も用いる。

月娘道:“可可的,就是你媽盼望,這一夜兒等不的。”(《金瓶》44.1b.8)

(月娘は「こともあろうにね。たとえお母さんが待っていても今晩くらいは待てないの?」と言った)

可可兒家裡就忙的恁樣兒。(《金瓶》45.9b.10)

(本当に家ではそんなに忙しいの?)

誰信那綿花嘴兒,可可兒的就是普天下婦人選遍了没有來。(《金瓶》75.20a.4)

(誰がそんな綿のような口を信じますか。こともあろうに、たとえ天下の女を選んでも、いないなんて)

河臺連忙道:“…。無奈官運平常,可可的遇見這等個不巧的事情。…。”(《兒女》13.14a.10)

(河川工事監督の長官は「…。いかんせん官吏運が特に良いというものではなかった。こともあろうにこんな不運なことに出くわしてしまって。…。」と慌てて言った)

張金風道:“…。只講叔父、嬸娘當日給你算命,可可兒的那瞎生就説了這等一句話,你可可兒的在悦來店遇着的是這個屬馬的,…。”(《兒女》26.12b.10)

(張金鳳は「…。叔父様、叔母様がその日、あなたの為に占いをなさいましたね。そして、丁度うまい具合にその盲目の占い師はこう言いましたね。『あなたが丁度悦来店で出逢った人は馬歳生まれで、…。』」と言った)

原來不曾打着大虫,正打在樹枝上,磕磕把那條棒折做兩截。(《金瓶》1.5b.6)

(何と虎には命中せず、木の枝に当たり、あいにくその棒が二つに折れたのです)

流水 liúshuǐ

釈義:「[副詞]すぐに」。現代共通語では一般に“立刻;马上”。

《现汉》、《补》にこの釈義を未収。《古今》に“流水”(釈義“急忙;赶紧”)を近世語語彙、《漢語》に釈義“流動之水;亦喩迅速或連接之意”、一般語語彙として収録。

方言辞典類では胡適「考証」に“流水”の釈義を“马上;一口气”とする。

《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.3424)に“流水”は未収。

《汉方大》(p.5121)に釈義[副詞]“立刻;马上”の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》、蒲松齢《聊斎俚曲集・姑妇曲》より挙例。

《基本词汇集》(p.4504)、《汉方词》の詞目“马上”項で“流水”を指す方言点は無い。

近世語辞典類では《例释》に釈義“立刻;马上”で《醒》第三十四回、蒲松齢《聊斎俚曲集・姑妇曲》より挙例。《百部小说》、《古方言》にも収録。

《石頭記》、《兒女英雄傳》に釈義“马上”の“流水”は未収。《金瓶梅詞話》に未収。

《醒》では同義語“立刻”も用いるが、“流水”の方が優勢。その例。

晁夫人道:“真也罷,假也罷,外邊請坐。”叫小厮們:“外邊流水端果子鹹案,中上座了。”(21.12b.1)

(晁夫人は「本当であれ、ウソであれ、それはいいですから外の間へどうぞお掛け下さい。」と言い、小者たちには「外の間へ早く果物、料理をお持ちして、上座へ案内しなさい。」と言いつけました)

又見老鴇子合孫蘭姬再三勸他説:“我不是嫌你。你進了學,也流水該到家,祖宗父母前磕个頭兒。…。”(38.11b.10)

(また、やり手婆々と孫蘭姫は再三彼に勧めて「私はあんたのことが嫌いではないのよ。あんたが上の学校へ行けば、直ちに家へ戻ってご先祖や両親の前で挨拶しなくちゃいけないからなのよ。…。」と言った)

寄姐道:“你説他没有棉衣裳,我流水的脱下棉褲棉袄來,雙手遞到你跟前,叫你給他穿去,我也只好這們着罷了。…。”(79.6a.4)

(寄姐は「あの子に綿入れの着物がないと言えば私はすぐに綿入れのズボンや袷を脱ぎ、両手を揃えてあんたの前へ届けるわ。あの子に着せてあげたらいい。私はこれで我慢するだけよ。…。」と言った)

偏生　piānshēng

釈義:「[副詞]事もあろうに、折悪しく」。現代共通語では一般に“偏偏”。

《现汉》(釈義“偏偏”)、《古今》(釈義“偏偏;恰巧”)に方言語彙として、《漢語》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に<方>符号を付して収める。

方言辞典類では《汉方常》に釈義[副詞]“偏偏”で《吴》、《武汉方言词汇》、《四川方言词典》に見えるとするだけで地域特定をせず、《红楼梦》、王西彦《春回地暖》、雑誌《人民文学》より挙例。

《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.5565)に釈義“偏偏”の方言点を東北官話(東北)、北京官話(北京)、西南官話(湖北省武漢。四川省成都。雲南省昆明、曲靖、保山、思茅、王溪、澄江、永勝、昭通)、呉語(上海市、松江、南匯周浦。江蘇省蘇州、呉江盛沢、丹陽童家橋、江陰。浙江省杭州、寧波、紹興、諸暨、嵊県崇仁、湖州双林)、湘語(湖南省長沙、湘郷)、贛語(江西省南昌)、閩語(福建省建瓯)である。

《汉方词》の詞目“偏偏”の項で“偏生”を指す方言点は、官話の武漢、呉語北部の蘇州、湘語の長沙(“偏[生]”)、贛語の南昌、閩語の建瓯である。

《現漢方大》(p.3859)に“偏生”(釈義“偏偏”)の方言点を武漢、銀川、丹陽、蘇州、杭州、寧波、長沙、婁底とする。

近世語辞典類では《古方言》に釈義“偏偏;偏巧”で《初刻拍案惊奇》、《红楼梦》より挙例する。《红楼梦语言词典》に“偏生(的)”(釈義“(1)恰巧。(2)与愿望和想法相反;偏偏”)を収録。

『《水滸》語彙と現代語』(p.391)に《水滸》、元曲《合汗衫》、《醒世恒言》、《初刻拍案驚奇》より挙例。《红楼梦词典》の「江浙一帯の方言」を引用する。

『白話語彙の研究』(p.264)では《紅楼夢》の“偏”、“偏生”、“偏(不)巧”、“偏是”について「(1)“偏”系の副詞は一般に文の冒頭(主語の前)に用いられる場合が多い。(2)“偏”は主語の後、述語の後にも置かれる。(3)“偏生”、“偏偏(的)”、“偏不巧”、“偏是”は主語の前に位置する」とする。

《例释》、《方言俗语》、《金瓶梅詞話》に未収。

《醒》では同義語“偏偏”と同じく“偏生”もよく用いられる。下記に示す如く、“偏生”は必ずしも文頭(主語の前)に位置するのではない。その例。

不知因甚緣故,科裏的揭帖偏生不帖出來,只得尋了門路,…。(17.6a.7)

(“帖出来”=“貼出来”)

(どういう訳か科内での掲示が折悪しく張り出されません。仕方なくつてを求めて、…)

誰知這素姐偏生不是別人家的女兒,却是那執鼓掌板道學薛先生的小姐。(68.2b.7)

(ところが、この素姐は事もあろうに他の家の娘ではなく、執鼓掌板道学薛先生のお嬢さんでした)

主語に前置される例。

偏生那條角帶再三揪拔不開,員領的那個結又着忙不能解脱,亂閧閧剥脱了衣裳,…。(97.10a.1)(“員領”=“圓領”)(“亂閧閧”=“亂哄哄”)

(あいにくその帯飾りは再三引っ張ったが抜けず、丸襟の結び目は慌てふためいていて解けない。てんやわんやで着物をはぎ取った。…)

《紅楼夢》、《兒女英雄傳》からの「主語に前置される」例。

鳳姐…道:“偏生我又病了。”(《戚序本》73.6b.7)

[注]《石頭記》の同一箇所では“偏生”に斜線を引き、“偏偏的”に書き換えている。

(鳳姐は…「あいにくまた病気になりました。」と言った)

帶上銀子同着他的奶公華忠南來。偏生的華忠又途中患病,還幸喜得就近百里之外住着他一個妹丈褚一官,…。(《兒女》4.1a.5)

(銀子を持ち、乳母の夫華忠と共に南へやって参りました。生憎華忠は途中で病になりましたが、幸いにも百里離れた処に妹の夫褚一官が住んでおり、…)

且是 qiěshì

釈義：「[副詞]本当に、確かに、まさしく」。現代共通語では一般に“真是; 确实; 正是”。

《现汉》に“且是”は無いが、“且”項に〈方〉で釈義を“表示经久: 买枝钢笔且是使呢/他要一说话, 且是完不了呢”とする。これらの挙例は「時間の長さが久しい」事を表している。時間の代わりに「性状」になれば「程度の甚だしさ」を示すのであろうか。《古今》、《漢語》に“且”(釈義“经久”)で、《古今》に方言語彙とする。《漢語》の“且是”は釈義が異なる(釈義“只是;却是;倒是”)。《拼音词汇》にも“且是”は未収。

方言辞典類では《汉方常》に“且”を副詞、北方方言で釈義“表示时间长”とする。そこの挙例を“要不是双燕姐姐叫我, 我且不出来呢。”(端木蕻良《曹雪芹》)とする。《现代北京》に“且”(釈義“常用于动词前, 表示该动作无休止或要延续相当长的时间”)を収録。

《山东》、《吴》、《基本词汇集》、《汉方大》、《汉方词》、《現漢方大》に未収。

近世語辞典類では『白話語彙の研究』(p.260)に「“且”は“且是”となって程度の甚だしさを表す。とくに明代までの白話に多くもちいられている」とし、《警世通言》、《西遊記》、《古今小説》より挙例。

《方言俗语》に“且是”を釈義(1)“倒是”で《东堂老》より挙例。釈義(2)“真是; 确实”で《水浒传》、《三遂平妖传》より挙例。“且是”は同音語“切是”のことであり、“真个”と同義とする。釈義(2)が該当する。

《红楼梦语言词典》に“且是”を釈義“正是; 真是”で“～连一点刚性也没有。(第 35 回)”/“贾母…:这茶想的到, ～地方, 东西都干净。(第 38 回)”の例を挙げる。

《近代汉语虚词词典》に“且是”(釈義“表示肯定的副词, ‘确是’”)を《拍案惊奇》(巻 1)より挙例。《金瓶梅词典》に“且是”を釈義“非常;很”とする。『《水滸》語彙と現代語』(p.370)に“且(是)”(釈義“真是; 确实; 着实”)を《水滸》、《金瓶梅詞話》、《三遂平妖傳》より挙例。

《例释》、《古方言》、《百部小说》に未収。

《醒》の例。

> 後來又陪了晁老來到通州, 見晁源棄了自己的結髮, 同了娼妾來到任中, 曉得他不止是个狂徒, 且是没有倫理的人了。(16.7b.1)
>
> (後で晁老に従って通州に来た。晁源が髪結いの妻を棄て娼妓の妾と一緒に転任地へ来たのを見て、狂人の如き奴だというだけでなく、倫理観の全く無い男だと知った)
>
> 小鴉兒…想道“這深更半夜, 大驚小怪的竅門, 又難爲那老季, 又叫起來, 且是又叫唐氏好做回避我。…。”(19.13b.9)
>
> (小鴉兒は…「こんな夜更けに大騒ぎして戸を叩いたら老季の奴を困らせてしまう。それに、奴を起こしたら全くうちのかみさん〈唐氏〉に逃げ隠れしろって言っているようなものだ。…。」と考えた)
>
> 這單豹是單于民的個兒子, …。在家且是孝順, 要一點忤逆的氣兒也是没有的。(25.9a.4)

（かの単豹は単于民の一人息子であった。…。家にあってはとても孝行息子で、微塵の逆らう気持ちも無かった）

但遠在七八千里路外，怎能得他來到跟前。且是連次吃虧以後，衆人又都看透了他的本事。(94.7a.6)

（しかし、遠く七、八千里の向こうに居る。どうして奴を眼前に連れて来られるだろうか。何度もしくじってからは皆も彼女が大したことのない人間だと見抜いてしまった）

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。

湊的同心結，且是好看。到明日你也替我穿恁條箍兒戴。(《金瓶》83.4a.11)

（集まって同心結の結びなのね。本当に綺麗わ。いずれ私にもこんなはちまきを作って頂戴）

且是連一點剛性也没有，連那些毛丫頭的氣都受到的。(《石頭》35.9b.6)

（本当にほんの少しの意気地も無いのよ。そして、女中ふぜいの怒りすらまともにお受けになるわ）

那阿巧纔得十二歲，且是乖覺。(《兒女》32.28b.2)

（阿巧は十二歳になったばかりですが、確かに利口でした）

情管 qíngguǎn

釈義：「①[動詞]保証する。②[副詞]きっと、絶対に」。現代共通語では一般に“①管保；保证。②一定”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“情管”を釈義“保证；管保”で山東方言とし、《聊斎俚曲集》、《醒》より挙例。

《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《关中方言》、《現漢方大》(p.4056)に“情管”は未収。

《汉方大》に“情管”（釈義“保证；管保”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）で、《聊斎俚曲集・墻头记》第二回、《醒》第十八回より挙例する。

近世語辞典類では《例释》に“情管”（釈義“保证；管保”）を《聊斎俚曲集》、《醒》第十八回より挙例。《考论》、《古方言》（釈義“保管；一定”）に収める。《近代汉语虚词词典》の“情管”は釈義(1)“准定”を《醒》第十八回より挙例。釈義(2)“大概”を《醒》第四回（“情管你的法灵了”）より挙例。

《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“一定”が極めて多く用いられる。“情管”も同じく多く用いられる。《醒》の“情管”は一般に釈義②[副詞]「きっと」である。

這情管是小珍的手段。你平日雖是大鋪騰，也還到不的這們闊綽。(4.7a.5)

（これはきっと珍ちゃんの手管ですな。あんたはいつも大盤振る舞いをしているのに、

あれほどの金しか使えないのかね)

小青梅這奴才慣替人家做牽頭,情管是個下和尚粧就姑子來家。(12.13a.10)

(小青梅の奴はよく不義密通などの男女の仲をとりもっていたので、きっとお坊様の服装を脱ぎ去り尼として家へ入れたんだ!)

心忙頭暈,情管是餓困了。我打和包鷄子,你起來瞪幾个,情管就好了,早到家。(38.12a.10)

(気分がすぐれず、目眩がするのはきっとお腹が空いているからでしょ。私が卵の白身で黄身を包む料理をこしらえますから、起きて何個かお食べなさい。必ずすぐによくなります。そして早く家へ帰りましょう)

湯湯　tāngtāng

釈義:「[副詞]①いとも簡単に。[動詞]②ちょっとぶつかる」。現代共通語では一般に"①<背诵诗文>非常熟练的样子。②碰(一)碰;碰触"。

《现汉》、《古今》、《漢語》,《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《徐州方言志》、《現漢方大》、《河北方言》にこの意味では未収。

《汉方大》(p.2220)は、上記釈義①、②ともに方言点を冀魯官話(山東省淄博)とする。

近世語辞典類では《例释》に"汤汤"の釈義(1)"背诵诗文非常熟练的样子"を《醒》第三十三回より挙例。釈義(2)"碰(一)碰"を《醒》第五十七回、《聊斎俚曲集》より挙例。更に、"挜挜"を《蒲松龄集·日用俗字·纸扎章》より挙例。

《方言俗语》に"荡荡"を釈義"形容极其流畅。'荡'音'汤'。《说文》段注:'荡音汤,古音也。后人省艸'。今徐州方言还说'背书背的汤汤的'"とする。

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

釈義①「[副詞] いとも簡単に」の場合。《醒》の例。

下記第一例に対して、黄肅秋注に"《尚书·尧典》:「汤汤洪水方割」。意为大水急流之貌,此处形容背书通熟如流水般又顺又快"とする。

别人拿上書去,湯湯的背了;號上書,正了字,好不省事。(33.13a.2)

(他の人は本を持って行きますと、いとも簡単に暗記します。本の中に筆で印をつけ、字形を正しく書き、指導の手間は全然かかりません)

老爺,這雖是个傷手瘡,長的去處子不好,湯湯兒就成了臁瘡,叫那皮靴熏壞了,要不把那丁住的壞皮蝕的净了,這光骨頭上怎麼生肌。(67.3a.5)

(旦那様、これは傷手瘡ですが、できた場所が悪いのです。どうかすると潰瘍になりやすく、皮靴によってむせて悪くなったのです。何だったらその悪い表面の皮膚を薬で灼いて取ってしまうのです。骨の上にどうして皮膚ができましょうか?)

這不又有這等好靠山。這京官湯湯兒就遇着恩典,　封兩代,去世的親家公,親家母都受七品的封。(83.3a.7)

（これは、こんなにもいい後ろ盾があることになりませんか？この京官がごく簡単に恩典に出くわせば、親子二代封爵、亡くなられた実の両親ともに七品の位を受けられるのです）

釈義②：「[動詞] ちょっとぶつかる」の場合。

この場合、単音字“湯”として捉える。《方言俗语》に“汤”で立項。釈義“微触;察;蹭”。その按語に“今徐州市、邳县等地仍有此语,徐州音càng”とする。《古方言》は“汤”（荡）（釈義“碰触”）を立項。《百部小说》にも収録。《金瓶梅词典》に“汤”[dàng]（釈義“碰;撞”。引申指打。一般写作‘荡’）とする。

《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に釈義“碰一碰儿”とする。

不料晁夫人就信以爲真,回説:“老七,你終是有年紀老練的人,可不這天爺近來更矮,湯湯兒就是現報。”（57.2b.10）

（思わず晁夫人は本当だと信じ込み、「老七さん、あんたは年を取った老練な人です。神様は近くで更に低くよく見ておいでです。ちょっと袖ふれあうのも、それは果報というものです。」と返事した）

《金瓶梅詞話》の場合は釈義「ぶつかる」から派生して「叩く」となる。その例。

湯他這幾下兒,打水不渾的,只像鬬猴兒一般。（《金瓶》83.3b.1）

（奴をちょっと叩いただけでは、水を掻き回しても濁らず、というもので、軽い軽い。さながら猿をからかっているようですよ）

未曾 wèicéng

釈義：「[副詞]…していない(、いまだ嘗て…ない)」。現代共通語では一般に[副詞]“没(有)”。

《现汉》に釈義[副詞]“没有”（“曾经”の否定）として、《古今》に釈義“不曾”として収録。いずれも一般語語彙。《漢語》に“未曾”、“不曾”は未収。《拼音词汇》に“未曾”、“不曾”を無標示で収録。現代共通語の“未曾”、

“不曾”は「“曾经”の否定」（過去の経験の否定）を示すだけでなく「“已然”の否定」（動作行為の否定）でもある。例えば、《应用汉语词典》の“未曾”項に釈義“还没有;不曾（“曾经”的否定）”とする。“还没有”は「“已然”の否定」で、“不曾”をわざわざ「“曾经”の否定」と注記している。これは“已然”の否定と“曾经”の否定の二種類の釈義を示している。

方言辞典類では《闽南方言》に“未曾”（釈義“不曾”）を収録。《广州话词典》に“未”を収録するものの“未曾”を未収。しかし、《实用广州话词典》に“未曾”を収録。

《汉方常》、《山东》、《吴》に未収。

《汉方词》の詞目“没(有)”（=“未”）項で“未曾”を指す方言点は粤語の広州、閩語の建瓯の如き南方のごく限定された地域でしかない。この釈義は「過去の経験の否定」（“曾经”

の否定)ではない。

《汉方大》(p.1156)に“未曾”([接続詞]釈義“不管;无论”)の方言点を晋語(陝北)とするが、釈義が全く異なる。

《現漢方大》(p.773)に釈義[副詞]“没有”の方言点を金華、広州とする。この他にも建甌(釈義“没有;從未有過”)、廈門(釈義“不曾;尚未”)がある。いずれも南方区域である。

近世語辞典類では《红楼梦语言词典》に釈義“[副詞]表示‘已然’的否定”とする。

《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》の例。これらの“未曾”の釈義はたとえ“曾”を付加していても「過去の経験の否定」(“曾经”の否定)ではなく純粋な副詞“没有”(“已然”の否定)である。“未”、“未曾”、“不曾”は“没”(“没有”)へと交替するのであるが、「《水滸》においてはまだ交替が始まっていなかったようである」(香坂順一『《水滸》語彙と現代語』p.47)。ところが、《醒》では完全に形勢逆転し、“未”、“未曾”は会話文において殆ど用いられていない。

這蕭北川治療胎前産後,真是手到病除。經他治的,一百个極少也活九十九人。只是有件毛病不好,往人家去,未曾看病,先要吃酒,掇了个酒盃,…。(4.9b.6)

(この蕭北川は産前産後の治療が非常に上手で、百人中九十九人までが良くなった。ただ、一つ欠点がある。それは、往診すると診察する前、先に酒を飲もうと盃を持つ点である)

次の例は、訴状ゆえに生硬な文であり“未曾”が似合うと思われる。

有今在官監生晁源未曾援例之先嘗與氏宿歇,後來漸久情濃,兩願嫁娶。(13.2a.4)

(今、官吏監生晁源有り。慣例による納金で官吏に就く前、氏と宿を共にし、後次第に久しくして情濃く二人は嫁取り嫁入りを願う)

疑問文の文末に用いる“…不曾?”型は旧白話に多かった。《醒》からのその例。

却説晁住媳婦…,一脚跨進門去,還説道:“兩個睡得好自在。醒了不曾。”(20.1b.3)

(さて、晁住のかみさんは…一足戸口をまたぎ入り「お二人さんは気楽にお眠りだね。目覚めたかい?」と申します)

同構造の型“…没曾?”、“…未曾?”は現代粤語にも無い。《醒》でも無い。ただ、現代粤語に「疑問文の文末に用いる“…未?”」型は存在するが《醒》にも少ないが見られる。《醒》からのその例。

李成名又另換了一匹馬,飛也似去了。回到蕭家,敲門進去,窗楞上拴了馬,問説:“那蕭老爹醒未。”(4.11a.4)

(李成名は別に馬を換え、飛ぶように行った。蕭家へ戻ると戸を叩いて入り、窓枠に馬を繋ぎ「蕭旦那はお目覚めになったかい?」と尋ねます)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの“未曾+V”の例。

原來西門慶一倒頭,棺材尚未曾預備。(《金瓶》79.22a.3)

(西門慶は死んだのですが、棺桶はまだ準備できていませんでした)

甚至於賈璉眉來眼去,私相偷期約的,只懼賈赦之威未曾到手。(《石頭》69.5b.2)

(甚だしきは賈璉に流し目を送り、逢い引きの約束をする者もあった。ただ賈赦の威を恐れ、手をつけてはいなかった)

故此他未曾開口,先向西間排插後面叫了聲"安公子"。(《兒女》8.2a.1)

(従って、彼女が口を開かない前に、先に西側の板壁仕切の裏手へ向かって「安公子!」と呼んだ)

幸得 xìngdé (幸的)

釈義:「[副詞]幸いにも」。現代共通語では一般に"幸亏"。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。但し、《现汉》には同義語"幸而;幸亏;幸喜"を収録。《漢語》に非軽声語[xìngdé]で釈義"多亏"を一般語語彙で収録。ただ、《拼音词汇》にも非軽声語[xìngdé]を収める。

方言辞典類では《汉方常》に"幸得"(釈義"幸好;幸亏")を非軽声語、四川方言として沙汀《堪察加小景》より挙例。

《山东》、《北京话》、《河北方言》に未収。

《基本词汇集》(p.4508)の詞目"幸亏"(～你来了,不然我就走错了)項で"幸得"、"幸的"、"幸"を指す方言点は無い。但し、"幸得…"を用いた"幸得好"の方言点を昭通、畢節とする。

《汉方大》(p.3141)に"幸得"(釈義"幸亏")の方言点を西南官話(四川省成都)、湘語(湖南省)、贛語(江西省南昌)、閩語(広東省海康)とする。

《汉方词》の詞目"幸亏"の項で"幸得"を指す方言点は、贛語の南昌のみである。

《現漢方大》(p.2075)に"幸得"(釈義"幸虧")の方言点を南昌、雷州、海口とする。

近世語辞典類では《金瓶梅词典》に"幸的"(釈義"有幸;幸运")を、《红楼梦语言词典》に"幸得"(釈義"幸亏;亏得")を軽声語で収録。

《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》では同義語"幸而"、"幸喜"、"虧不儘"、"虧了"が多く使用される。"幸得"も同様に多く使用される。"幸得"の例。

幸得把那麥子收拾完了,方纔大雨傾將下來。(16.6a.10)

(幸いにもムギを片付け終わってから大雨となりました)

那婦人幸得遇了个好人,送在个尼姑菴裏寄住,告了狀,正在嚴限緝拿。(88.6a.3)

(その女性は幸いある善き人に逢って尼寺に送られた。そして、告訴状を提出したが、丁度期限付きの逮捕状が出ています)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。

我如今又好了,幸得我姐姐嫁在守備府中,又娶了親事。(《金瓶》98.2a.11)

（俺も今では良くなった。俺の姉が守備府に嫁いだので、また俺も嫁をもらったのさ）

寶玉…笑道："…。幸得偺們有福，生在當今之世，大舜之正裔，聖虞之功德仁孝，…。"（《石頭》63.13a.10）

（宝玉は…笑って「…。幸い、我々は今の世に生まれ、大舜の正裔におわします聖天子のご功徳ご仁徳は、…。」と言った）

幸得他有那過人的天分，領畧得到。（《兒女》19.8a.5）

（幸い、その人には他の人より優れた天分があり、理解することができました）

同音語"幸的"の《醒》から例。

幸得狄希陳白日周旋人事，晚間赴席餞行，幸的無甚工夫領他的盛愛。（85.13b.2）

（幸いにも狄希陳は、昼間つけ届けの応対、夜は送別の宴に赴いて家にはいません。従って、妻の大いなる虐待という愛を受ける暇もない）

《金瓶梅詞話》からの例。

幸的他若好了，把棺材就捨與人，也不值甚麽。（《金瓶》62.9a.11）

（幸い彼女が良くなれば、〈準備した〉棺桶を人に施しても何でもありませんわ）

同義語"幸"の《醒》からの例。

衆會友幸還不認得是他，大家混過去了。（74.13b.1）

（幸い友人達は彼女を知らなかったので、皆はうまくごまかした）

一別氣　yìbiéqì　（一憋氣；一憋氣兒）

釈義：「[副詞]一気に、一息に」。現代共通語では一般に"一口气"。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。

方言辞典類では《山东》に"一憋气"（釈義"一口气"）で省内方言点を桓台、陽谷とする。同義の儿化語"一憋气儿"の省内方言点を陽谷とする。

《汉方常》、《北京话》、《现代北京》、《关中方言》、《河北方言》、《吴》に未収。

《汉方大》(p.32)は[副詞]"一别气"（釈義"一口气"）の方言点を冀魯官話（山東方言）とし、第六十九回より挙例する。同音語"一憋气儿"の方言点を冀魯官話（天津）とする。"一瘪气"の方言点を冀魯官話（山東省）で《聊斎俚曲集》より挙例。なお、"一憋气"は未収。

《現漢方大》(p.61)に"一憋氣兒"（釈義"一口氣；一股勁兒地"）の方言点を済南とする。なお、"一别氣"は未収。

近世語辞典類では《例释》に"一别气"（釈義"一口气"）を《醒》第六十九回より、また、"一瘪气"を《聊斎俚曲集》より挙例。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に釈義"一口气"とする。

這狄希陳一別氣跑了二十七八里路，跑的　軟骨折，得劉嫂子説了分上，騎着騾，就是那八人轎也没有這般受用，…。（69.2b.9）

（狄希陳は一気に二十七八里の道のりを走ったが、もう筋はふやけ骨は折れんばかりのくたくた。幸い劉おばさんのお陰でラバに乗った。それは、たとえ八人乗りの駕籠でさえこんなに気持ち良いことはない。…）

一答 yìdā （一搭）

釈義：「[副詞]一緒に」。現代共通語では一般に“一块儿; 一处; 一起”。

《现汉》に未収。《古今》、《补》（～儿）に釈義[副詞]“一块儿; 一起”、方言語彙として、《漢語》に一般語語彙として収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に“一搭”と作り陝西等地方言とし、李伯钊《桦树沟》、《人民文学》1962.6 より挙例。《关中方言》は“一搭(答)”で、語尾に“儿”、“里”を付接できるとする。《山东》、《吴》、《现代北京》に未収。

《基本词汇集》(p.4511)の詞目“一起”項で“一搭”を指す方言点を天水(“一嗒”)、烏魯木斉(“一嗒”)とする。また、儿化語“一搭儿”を指す方言点は離石、西安、宝鶏とする。

《汉方词》の詞目“一起”(一起走)の項で“一搭里”を指す方言点は官話の西安のみである。これは、《汉方常》の指摘する陝西等地方言と合致する。

《汉方大》(p.17)に“一搭”(釈義[副詞]“一起;一道”)で方言点を中原官話(新疆維吾爾自治区吐魯番。陝西省宝鶏)、晋語(山西省陽曲、楡社。内蒙古自治区臨河。陝西省北部。<“一”と作れば、陝西省北部。山西省西部>)、蘭銀官話(新疆維吾爾自治区烏魯木斉)、呉語(江蘇省蘇州)とする。また、釈義[名詞]“一处; 一块儿”で方言点を中原官話(陝西省西安)、蘭銀官話(甘粛省、青海省、新疆維吾爾自治区烏魯木斉)、晋語(山西省晋城。陝西省北部)、呉語(上海市)とする。“一打”と作り方言点を晋語(山西省嵐県)とする。[名詞]の用法は動詞の前に用いない。

同書(p.45)に“一搭里”(釈義[副詞]“一块儿; 一起”)の方言点を中原官話(新疆維吾爾自治区鄯善。陝西省西安)、蘭銀官話(新疆維吾爾自治区烏魯木斉。甘粛省蘭州)とする。また、釈義[名詞]“一块儿; 一处”の方言点を晋語(山西省孝義。陝西省北部)、蘭銀官話(甘粛省蘭州)とする。

《現漢方大》(p.47)に“一搭”(釈義“一同”)の方言点を太原、“一搭裏”(釈義“一同;一塊兒”)の方言点を銀川。また、同書(p.51)に“一道”(釈義“一起;一塊兒”)の方言点を揚州、成都とする。

近世語辞典類では《方言俗语》に“一答儿”(及び“一搭儿”)で立項し、同義語“一答里; 一搭儿;一搭儿里”とも作るとする。《古方言》の“一搭”は“一答儿;一塌儿;一笪”とも作り、元·无名氏《翫江亭》、元·无名氏《看钱奴》、《醒世恒言》より挙例。《金瓶梅词典》に“一答(儿)(里)”、“一搭(儿)(里)”(釈義“一同; 一起; 一块儿”)を収録。

『山東方言の調査と研究』(p.96)に“一答兒”(釈義“一块儿、一起、一处”)で“今见于鲁西、鲁南、鲁中等地。又作‘一搭儿’”とする。

《例释》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。釈義[名詞]“一处;一块儿”。黄肅秋注に釈義“一块、一起、一道”とする。

一个男子漢養女弔婦也是常事,就該這們下狠的凌逼麼。這是前生的冤業,今生裏撞成一答了。(75.7b.8)(“弔婦”=“吊婦”)(“一答”=“一搭”)

(男にとって、妾を作ったり、捨てたりするのはよくあることで、こんなにもひどいしうちを受けねばならないのか？これは前世の冤業で、それが今世でぶつかって一緒になったのだろう)

《金瓶梅詞話》からの例。

金蓮和孟玉樓一答兒下轎。(《金瓶》35.20a.7)

(金蓮と孟玉楼は一緒に駕籠から降りた)

你也磨,都教小厮帶出來,一答兒里磨了罷。(《金瓶》58.19b.3)

(あなたも<鏡を>磨くのなら小者に全部持ち出させ、一緒に磨かせましょう)

咱三個一答兒里好做。(《金瓶》29.1b.8)

(私達三人一緒だとやりやすいのよ)

如何跟着他一答兒裡走。(《金瓶》42.4a.9)

(どうして奴と一緒に歩いているのかね)

亦發和吹打的一答裡吃罷。(《金瓶》46.1b.7)

(いっそ楽師達と一緒に食べさせましょう)

六頂轎子一搭兒起身。(《金瓶》41.1a.10)

(六挺の駕籠で一緒に出発します)

你每坐着多一搭兒里擺茶。(《金瓶》32.3b.6)

(あなた達みなで一緒にお茶を戴きましょう)

就晚夕一搭兒裡坐坐。(《金瓶》42.3b.4)

(晩には一緒に陪席だよ)

一堆　yìduī　(一堆兒)

釈義:「[副詞]一緒に」。現代共通語では一般に“一起;一块儿”。

《现汉》、《古今》、《漢語》に未収。《补》に儿化語“一堆儿”(釈義“一起;一块儿”)を一般語語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》に儿化語“一堆儿”で収録。

《汉方常》にこの意味では未収(蘇州方言で釈義を“一带;附近”とするが、我々の取り扱うケースと異なる)。《关中方言》に未収。

《基本词汇集》(p.4511)の詞目“一起”項で“一堆”を指す方言点は無い。但し、儿化語“一堆儿”を指す方言点は煙台、利津である。

《汉方词》の詞目“一起”(一起走)の項で“一堆”を指す方言点は、官話の北京([一]块堆

儿)・成都、閩語の福州・建瓯(一堆口)である(但し、建瓯の“口”は“堆”の派生音とする)。

《汉方大》(p.14)に“一堆”(釈義“一起;一块儿”)で方言点を冀魯官話、西南官話、徽語、呉語、閩語とする。また、同書(p.41)に“一堆儿”で方言点を冀魯官話、膠遼官話とする。

《現漢方大》(p.42)に“一推”(釈義“一塊兒;同一處所”)の方言点を武漢、柳州、丹陽、南昌、成都、績溪とする。また、兒化語“一推兒”の方言点を済南、南京、牟平とする。

近世語辞典類では《例释》に非儿化語“一堆”(釈義“一起;一块”)で《聊斎俚曲集》より挙例。《古方言》は釈義“一走;一同”で《聊斎俚曲集》及び会話部分が蘇州語で書かれた《海上花列传》より挙例。

《方言俗语》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

素姐説:“人道他在洪井衚衕娶了童銀的閨女小寄姐,合調羹一堆住着。我剛纔尋到那裏,只見了調羹,再没見别人。…。”(77.8a.5)

(素姐は「あいつは洪井胡同で童銀細工職人の娘寄姐を娶り、調羹とも一緒に住んでいると聞いているよ。私は先程そこへ捜しに行ったけれども、調羹がいただけで、他に誰も見かけなかったわ。…。」と言った)

《兒女英雄傳》からの例。釈義「一緒に」。

那姨奶奶…説道:“…。你老要起夜,有我的馬桶呢,你跟我一堆兒撒不好喂。…。”

(《兒女》16.21a.4)

(若奥さんは…「…。あんたが夜中に起きなすっても、私の便器がありますから、一緒にそれを使えばいいでしょ。…。」と言った)

《金瓶梅詞話》では“(一)堆”は釈義「ひとかたまりの…」を示す量詞であり、用法が異なる。

一堆喜的搶進前來。(《金瓶》56.5b.3)

(喜びいっぱいでおもてへやって来る)

一起 yìqǐ

釈義:「[副詞]これまで」。現代共通語では一般に“向来;一向;原来”。

《现汉》、《古今》、《补》、《漢語》にこの意味では未収。

方言辞典類では《山东》にこの種の“一起”は未収。但し、“一起根儿”、“一起了”(釈義“一开始;原先”)を収める。これは、《例释》の按語に「現在の方言では“一起根、一起了”とも言う」と指摘するのと合致する。

《河北方言》は釈義が異なる(釈義“一块儿”)。《汉方常》、《徐州方言志》、《现代北京》、《現漢方大》(p.33)に未収。《汉方词》の詞目“一向”項で“一起”を指す方言点は無い。

《汉方大》(p.13)に釈義“向来;一向”の方言点を冀魯官話(山東省)とする。そして、《聊斎俚曲集》、《醒》第十二回より挙例。

近世語辞典類では《例释》に“一起”(釈義“向来;原来”)を《聊斎俚曲集》、《醒》第十二回より挙例。この按語に“今方言中还说‘一起根;一起了’”とする。《古方言》にも収める。また、《百部小说》も《醒》第十二回より挙例する。

《金瓶梅詞話》、《方言俗语》、《石頭記》、《兒女英雄傳》にもこの意味では未収。

《醒》の例。

姑子又不是從我手招了來的,一起在你家裏走動,誰不認的。(12.13b.5)

(尼さんは、私が呼んだのではないけれども、これまでこの家に出入りしているのは誰でもが知っています)

已就　yǐjiù

釈義:「[副詞]きっと、間違いなく」。現代共通語では一般に“一定;肯定”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》に釈義“一定;肯定”で山東方言とし、《醒》より挙例(他に、北京、天津など地方言で別の釈義:“已成为既成事实;已经这样<多叠用>”が存在する)。

《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《关中方言》、《吴》にこの意味では未収。

《汉方词》の詞目“一定”の項で“已就”を指す方言点は無い。

《汉方大》(p.407)に“一定”の釈義項目は無い。代わりに、“已就”(釈義[副詞]“已经;事已如此”)の方言点を北京官話、冀魯官話とする。《醒》のこの第十八回の箇所を用例として挙げる。確かに、下記第一例は“一定”または“已经”のどちらの釈義でも可である。しかし、《醒》の他の用例を勘案したとき、釈義“一定”の方が適合している。第二例は、“已就”のすぐ後に“已是”(「既に」)が見える。

《現漢方大》(p.415)に“已就”の釈義“一定;肯定”は未収(釈義“已然”ならば方言点を哈爾濱とする)。

近世語辞典類では《例释》に釈義“一定;肯定”で《醒》第十八回より挙例。《考论》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》にこの意味では未収。

《醒》の例。

那些媒婆知道晁夫人回來了,珍哥已就出不來了,每日陣進陣出,俱來與晁大舍提親,也不管男女的八字合得來合不來,…。(18.1b.10)(“已就”=“已就”)

(その縁談のとりもち女連中は晁夫人が戻ってきて珍哥はきっと<牢獄から>出て来られないと、毎日入れ替わり晁大舍に縁談を持ってきた。それも男女の生年月日時刻の相性が合うかなど全くお構いなしです。…)

狄周説起孫蘭姬,道:“昨日我若去得再遲一步,已就不看見他了。他已是穿了衣裳,…。”(41.1a.6)(“已就”=“已就”)(“已是”=“已是”)

(狄周は孫蘭姬に触れて「昨日、あっしがもう一足行くのが遅ければきっと彼女に会

えなかったです。彼女は既に着物を着ておりました。…。」と申します)

薛如卞故意説道:“俺姐夫已就不是人了,你只合他一般見識,是待怎麼。…。”(63.10a.5)(“已就”=“已就”)

(薛如卞は故意に「義兄さんはきっと人間ではなくなったのです。だからあなたはそんな人と同じ見識でどうしますか?…。」と言いました)

《兒女英雄傳》からの例。釈義は“已經”。

(金鳳)…説道:“…。玉鳳姐姐救了我兩家性命,在公婆現在這番情義,已就算報過他來了,只是媳婦合我父母今生怎的答報。…。”(《兒女》23.19b.1)

(<金鳳は>…「…。玉鳳お姉様は私達両家の命を救ってくれました。そして、お義父さま、お義母様におかれましては既にお姉様に対しての恩返しはされました。ただ、嫁の私と私の両親は今世どのようにしてご恩に報えば良いのやら。…。」と言った)

原道 yuándào

釈義:「[副詞]もともと、何と」。現代共通語では一般に“原来”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。しかし、共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》に収録。

方言辞典類では《汉方常》に釈義“原来”で山東方言とし、《醒》より挙例。

《山东》、《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.3143)に“原道”は未収。

《基本词汇集》(p.4493)の詞目“本来”(~就没有这回事)項で“原道”を指す方言点は無い。

《汉方大》(p.4703)に釈義“原来”の方言点を冀魯官話(山東省淄博)とし、《醒》第二十七回より挙例する。

近世語辞典類では《例释》に釈義“原来”で《醒》第二十七回より挙例。《考论》に収める。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

那快手合主人家豈有不怕本官上司,倒奉承你這兩个外來的窮老。原道他真是个太爺太奶奶,三頓飯食,鷄魚酒肉,極其奉承。(27.10b.4)

(その捕り手や宿の主人は自分のところの上司を恐れず、逆に、外来者の貧乏夫婦にゴマをすることがあろうか。宿の主はもともと本当にご両親だと思い、三度の食事にニワトリ、魚、酒、肉を出して大いにご機嫌とりをしたのです)

真個 zhēngè

釈義:「[副詞]本当に、確かに」。現代共通語では一般に“的确;实在;确实:真的”。

《现汉》に“真个”(釈義“的确;实在”)を方言語彙、《古今》に釈義“的确;真的”で方言語彙とする。《漢語》に“真個”(釈義“實在”)を一般語語彙とする。《拼音词汇》に“真个”を方言語彙、“真格的”(真个的)も方言語彙とする。

方言辞典類では《吴》に“真个”(釈義“的确;实在”)を张春帆《九尾龟》より挙例。また、

“真格”とも作る。

《汉方常》に“真个”(釈義“的确; 实在”)を北方方言で李　人《暴风雨前》(我们那时的胆子, 真个也太小了)より挙例。一方、“真个”(釈義“真的”)を呉方言とする。このように、釈義を分けているが、《漢語》の“真的”項に“猶言‘的確’”とする如く、“真的”と“的确”の差が明確ではない。

《山东》(p.499)に“真个儿”(釈義“实在; 的确”)の省内方言点を威海とする。また、“真个的”(釈義“真的”)の省内方言点を威海、曲阜、陽谷、臨沂とする。《现代北京》に“真格的”[真个的](釈義“真的; 确实; 实在”)及び“真个”(釈義“简直; 的确; 确实”)を収録。

《汉方词》に未収。

《汉方大》(p.4609)に“真个”は多義語とする。即ち、釈義(1)[代詞]“这样”の方言点は晋語(山西省忻州、定襄)、釈義(2)[形容詞]“真”(跟‘假’相对)の方言点は冀魯官話(山東省)、《真本金瓶梅》より挙例、釈義(3)[副詞]“真的; 实在; 确实”の方言点を冀魯官話(河北省威県。山東省)、中原官話(甘粛省鎮原)、晋語(山西省太原、陽曲、朔県、忻州)、西南官話(雲南省昆明、大理)、呉語(上海)、贛語(江西省新余)とする。

《現漢方大》(p.3093)に“真個”(釈義“實在; 的確; 真的”)の方言点を西安、忻州、崇明、上海、広州とする。同義語“真個的”(釈義“確實的; (動)真的”)の方言点を済南、“真格”(釈義“真的; 的確”)の方言点を銀川、“真格兒的”(釈義“實在的; 真的”)の方言点を哈爾濱、徐州とする。

近世語辞典類では《例释》に“真果”(真个)(釈義“真(的)”)を《聊斎俚曲集》より挙例。また、“真果”を“真个”とも作り《真本金瓶梅》、《醒》第四十六回より挙例。《近代汉语虚词词典》に“真个”(釈義“的确”)を《五代史》、《刘知远诸宫调》、《西游记》より挙例。《红楼梦》に“真个”(釈義“果真; 确实”)を収録。また、“真个的”(釈義“真正的;真格的”)を収録。なお、“真果”は未収。

《方言俗语》に“真个”(釈義“真的, 当真”)を《燕青博鱼》、《醒》第八回、《金瓶梅詞話》より挙例。そして、“北方话多有此语”とする。《金瓶梅词典》に“真个”(釈義“实在; 确实; 真正”)を、《红楼梦语言词典》にも“真个”(釈義“果真; 确实”)、“真个的”(釈義“真正的; 真格的”)を収録。『山東方言の調査と研究』(p.114)にも“真个”(釈義“当真; 真格”)を“今魯西、魯南方言又称‘当真个的’”とする。

《古方言》に未収。

晁大舍道：“是真个麽。大晌午, 什麽和尚道士敢打這裡大拉拉的出去。”(8.12b.8)

(晁大舎は「本当かい？真っ昼間から和尚や道士様がここから平然と出て来たなんて！」と言った)

素姐道：“是怎麽另娶哩。真個麽。是多偺的事。”(86.3a.1)(“多偺”＝“多咱”)

(素姐は「どのようにして別に娶ったのだい？本当かい？それはいつの事だい？」と

言った)

連氏道："真個麽。幾時起身。俺怎麽通不見説起呢。"(68.10b.9)

(連氏は「本当ですか？いつ発つんですか？私に全く言ってくれないんですよ！」と言った)

就是那一等真个尋死的, 也不過自恃了有強兄惡父, 狠弟兇兒, 借了他的人命爲由, …。(30.3a.8)("兇兒" = "凶兒")

(たとえ本当に死を求める者がいても単に強悪父兄や凶頑弟息の為であるにすぎない。その人の命を借りて、…)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。

桂姐道："姑夫, 你真個回了, 你哄我哩。"(《金瓶》44.2a.4)

(桂姐は「お兄さん、あなた本当に帰したの？あなた、私を騙しているのね。」と言った)

紫鵑…笑道："姨太太真個倚老賣老的起來。"(《石頭》57.15a.10)

(紫鵑は…笑って「姨太太は本当に年寄り風を吹かせなさいますわ。」と言った)

鳳姐冷笑道："我也是一場痴心白使了。我真個的還等錢作什麽, …。"(《石頭》72.8a.3)

(鳳姐は冷笑して「私も一場の妄想を無駄に使っています。私は本当にお金を待ってなどいないのよ。…。」と言った)

張金鳳…道："…。即或有事, 這也是命中造定, 真個的, 叫姐姐管我們一輩子不成。"(《兒女》9.17a.9)

(張金鳳は…「…。たとえ事件が起こっても、それは運命です。本当ですよ。お姉さまに我々を一生面倒見て貰う訳にはゆきませんわ！」と言った)

[文献]

西周生,《醒世姻缘传》(線装二函全二十冊),人民文学出版社影印発行(1988 年第 1 版, 1994 年第 2 次印刷)。

———,《醒世姻缘传》(全五冊,袁世碩前言),「古本小説集成」所収,上海古籍出版社,1994 年刊。

———,《醒世姻缘传》(翟冰校点),齐鲁书社, 1996 年版。

———,《醒世姻缘传》(黄肃秋校注),上海古籍出版社, 1981 年版及び 1985 年第 2 次印刷版。略称<<醒>>。

笑笑生,《金瓶梅詞話》(萬暦本),大安影印本, 1963 年版。略称<<金瓶梅>>。

蘭陵笑笑生,全本《金瓶梅詞話》,香港太平書局,1982 年版。

曹雪芹,《脂硯齋重評石頭記》,中華書局香港分局,1977 年版。略称《石頭》。

曹雪芹,《原本紅樓夢》(戚蓼生序本),「古本小説集成」所収,上海古籍出版社,1994 年刊。略称《戚序本》。

曹雪芹、高鶚,《程甲本紅樓夢》書目文献出版社,1992 年刊(影印本)。

曹雪芹,《紅樓夢八十回校本》,中華書局香港分局,1977 年版。略称《紅》。

文康,《兒女英雄傳》,「古本小説集成」所収,上海古籍出版社,1994 年刊。

凌濛初,《初刻拍案驚奇》,上海古籍出版社,1982 年刊。

吳沃堯,《二十年目睹之怪現状》,江西人民出版社,1988 年刊。

C. W. MATEER,《官話類編(A COURSE of MANDARIN LESSONS)》,SHANGHAI:AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS,(ABRIDGED EDITION)1916 年([FIRST EDITION,1892]、[SECOND EDITION,1898])。

FRANCIS THOMAS WADE,《語言自邇集》(第二版)[张卫东 译],北京大学出版社,2004 年(原版:1886 年刊)。

尾崎実,『《語言自邇集》語彙索引(初稿)』,明清文学言語研究会,1965 年。

梅節校勘,《金瓶梅詞話校讀記》,北京圖書館出版社,2004 年。

中国社会科学院语言研究所词典编辑室,《现代汉语词典》(第三版),商务印书馆,1996 年版。略称<<现汉>>。

———,《现代汉语词典》(修訂第三版・增補本),商务印书馆,2002 年版。

———,《现代汉语词典・补编》,商务印书馆,1989 年版。略称<<补>>。

吴昌恒等,<<古今汉语实用词典>>,四川人民出版社,1989 年版。略称<<古今>>。

<<汉语词典>>,商务印书馆,1937 年(商务印书馆香港分局,1977 年版)。略称<<汉语>>。

闵家骥、晁继周、刘介明,<<汉语方言常用词词典>>,浙江教育出版社,1991 年版。略称<<汉方常>>。

董绍克、张家芝主编,<<山东方言词典>>,语文出版社,1997 年。略称<<山东>>。

董遵章,<<元明清白话著作中山东方言例释>>,山东教育出版社,1985 年。略称<<例释>>。

徐复岭,<<醒世姻缘传作者和语言考论>>,齐鲁书社,1993 年。略称<<考论>>。

宋孝才,<<北京话语词汇释>>,北京语言学院出版社,1987 年。略称<<北京话>>。

陈刚、宋孝才、张秀珍,《现代北京口语词典》,语文出版社,1977 年。略称《现代北京》。

陈刚,<<北京方言词典>>,商务印书馆,1985 年。略称《北京方言》。

齐如山,《北京土话》,北京燕山出版社,1991 年。

高艾军、傅民,《北京话词语》(增订本),北京大学出版社,2001 年。

景尔强,《关中方言词语汇释》,陕西人民出版社,2000 年。略称《关中方言》。

<<汉语拼音词汇>>编写组,<<汉语拼音词汇>>(增订稿),文字改革出版社,1963 年。

———,<<汉语拼音词汇>>(1989年重编本),语文出版社,1991年。略称<<拼音词汇>>。

李申,<<金瓶梅方言俗语汇释>>,北京师范学院出版社,1992 年。略称<<方言俗语>>。

———,<<徐州方言志>>,语文出版社,1985 年。

吴士勋、王东明主编,<<宋元明清百部小说语词大词典>>,陕西人民教育出版社,1992 年。略称《百部小说》。

岳国钧,《元明清文学方言俗语辞典》,贵州人民出版社,1998 年。

張洵如編、陳剛校訂,《北京话轻声词汇》(中国語文叢書),中国语文杂志社,1956 年。

许少峰主编,<<近代汉语词典>>,团结出版社,1997 年。略称《近汉》。

高文达主编,《近代汉语词典》,知识出版社,1992 年。

林宝卿,《闽南方言与古汉语同源词典》,厦门大学出版社,1999 年。略称《闽南方言》。

周定一主编,《红楼梦语言词典》,商务印书馆,1995 年。

詹伯慧主编,《汉语方言及方言调查》,湖北教育出版社,1991 年。

钱曾怡,<<博山方言研究>>,社会科学文献出版社,1993 年。

———,<<济南方言词典>>,江苏教育出版社,1997 年(李荣主编,《现代汉语方言大词典》分卷)。

———,《山东方言研究》,齐鲁书社,2001 年。

馬鳳如,《山東方言の調査と研究》,白帝社,2004 年。

白维国,<<金瓶梅词典>>,中华书局,1991 年。

杨增武主编,张光明、温端政编纂,《忻州方言俗语大词典》,上海辞书出版社,2002 年。

周德清輯,《中原音韻》,台北・藝文印書館,1987 年版。

许皓光、张大明,<<简明东北方言词典>>,辽宁人民出版社,1988 年。

张喆生,<<古方言词语例释>>,江苏教育出版社,1999 年。略称《古方言》。

王树声,<<东北方言口语词汇例释>>,黑龙江人民出版社,1996 年。

北京大学中国语言文学系语言学教研室,<<汉语方言词汇>>(第二版),语文出版社,1995 年。略称《汉方词》。

傅兴岭、陈章焕主编,《常用构词字典》,中国人民大学出版社,1982 年。略称<<常>>。

许宝华、宫田一郎,《汉语方言大词典》(全五冊),中华书局,1996 年。略称《汉方大》。

李荣主编,戎文敏、周方、馬鎮興、余立新、吴葆勒,《現代漢語方言大詞典》(全六冊),江苏教育出版社,2002 年。略称《現漢方大》。

俞光中、植田均,《近代汉语语法研究》,学林出版社,1999 年。

冯春田,《近代汉语语法研究》,山东教育出版社,2000 年。

贺巍,《洛阳方言研究》,社会科学文献出版社,1993 年。

方松熹,《舟山方言研究》,社会科学文献出版社,1993 年。

颜森,《黎川方言研究》,社会科学文献出版社,1993 年。

冯爱珍,《福清方言研究》,社会科学文献出版社,1993 年。

朱建颂,《武汉方言研究》,武汉出版社,1992 年。

王文虎、张一舟、舟家筠,《四川方言词典》,四川人民出版社,1987 年。

朱彰年、薛恭穆、汪维辉、周志锋,《宁波方言词典》,汉语大词典出版社,1996 年。

陈汝立、周磊、王燕,《新疆汉语方言词典》,新疆人民出版社,1990 年。

陳彭年等重修,《校正宋本廣韻》,台北藝文印書館,1981 年版。

丁度等撰,《集韻》(影印本),中文出版社,1982 年。

王力主編,王力、唐作藩、郭錫良、曹先擢、何九盈、蒋紹愚、張雙棣,《王力古漢語字典》,中華書局,2000 年。

《古汉语常用字字典》编写组,《古汉语常用字字典》(修订版),商务印书馆,1993 年。

蒲松龄著，路大荒整理，<<蒲松龄集>>(一～四卷)，上海古籍出版社，1986年。

汉语大词典编纂处·日本禅文化研究所，<<多功能汉语大词典索引>>，汉语大词典出版社，1977年。

陈章太、李行健主编，<<普通话基础方言基本词汇集>>(全五册)，语文出版社，1996年。略称《基本词汇集》。

李行健，<<河北方言词汇编>>，商务印书馆，1995年。略称《河北方言》。

饶秉才、欧阳觉亚、周无忌，<<广州话方言词典>>，商务印书馆香港分馆，1981年。

陈慧英，《实用广州话词典》，汉语大词典出版社，1994年。

许宝华、汤珍珠，《上海方言词汇》，上海教育出版社，1991年。

闵家骥等，<<简明吴方言词典>>，上海辞书出版社，1986年。略称<<吴>>。

罗韵希等，<<成都话方言词典>>，四川省社会科学院出版社，1987年。

张华文、毛玉玲，<<昆明方言词典>>，云南教育出版社，1997年。

丁全、田小枫，《南阳方言》，中州書籍出版社，2001年。

张涌泉，《汉语俗字丛稿》，中华书局，2000年。

河北省昌黎县县志编纂委员会、中国社会科学院语言研究所，《昌黎方言志》，上海教育出版社，1984年。

何金松，《虚词历时词典》，湖北人民出版社，1994年。

石汝杰、宫田一郎，《明清吴语词典》，上海辞书出版社，2005年。

江藍生，《近代汉语探源原》，商务印书馆，2000年。

雷文治，《近代汉语虚词词典》，河北教育出版社，2002年。

王吉亭、王素蓉、张少成，《现代常用文言书面语》，重慶出版社，1990年。

蔣宗福，《四川方言詞語考釋》巴蜀書社，2002年。

褚半农《<金瓶梅>中的上海方言研究》世纪出版集团·上海古籍出版社，2005年。

聂志平《〈金瓶梅词话〉中的东北方言词语—兼论〈金瓶梅词话〉所使用的语言为以北方通语为基础的明官话》(戚晓杰、高明乐主编《汉语教学与研究文集——纪念黄伯荣教授从教50周年》所收) 高等教育出版社，2005年。

曹小云《〈跻春台〉词语研究》，安徽大学出版社，2004年。

杨荣祥《近代汉语副词研究》，商务印书馆，2005年。

龚千炎，《儿女英雄传虚词例汇》，语文出版社，1994年。

张华文，《昆明方言词源断代考辨》，民族出版社，2002年。